

ifの短編集

人類（仮）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最近読みはじめて衝動的に書きたくなってしまいました。

基本は出久くんを改造するだけ。気が向いた他のキャラのifもやるかも。

読んでいただければ幸いです。

目次

緑谷出久は才能がある

緑谷出久は目覚めた	—	1
緑谷出久は継承した	—	16
緑谷出久は継承した	—	35
緑谷出久は理解した	—	53
緑谷出久は理解した	—	70
緑谷出久は理解した	—	86
緑谷出久は呼び出した	—	104
一発ネタ	—	

緑谷出久は目覚めた

緑谷出久は目覚めた

とある中学校。夕日に照らされている放課後の校舎の前で一人の少年が焼け焦げたノートをもつてうつむいている。モジャモジャとした緑髪、目元のそばかす、どこか地味な雰囲気を漂わせた少年の名は緑谷出久。

うつむく彼の目には涙がたまっており、その肩は震えている。彼の持つノートの表紙にかかっている文字は『将来のためのヒーロー分析No. 13』

人が常人を越えた超常の能力である『個性』を持つて生まれてくるのが当たり前这个时代である超常社会。犯罪者も『個性』持ちが当たり前となり、その力を悪用した過激な犯罪が増えていく。

そんななかで生まれた職業が『個性』を發揮して犯罪者を捕まえていく『ヒーロー』だった。まさに漫画の中の理想が現実になった存在。そんな職業に多くの子供が憧れた。

緑谷出久もその一人だ。しかも彼の情熱は尋常なものではなく、すごいと思つたヒーローたちの個性、戦闘スタイルその他を観察し分析、ノートにまとめる他、ヒーローた

ちの個性の弱点や活用法を考えたりなどもしていた。まさにヒーローになるために生き続けている少年。

だが、しかし神様は彼に対して冷たかった。

彼は『無個性』だった。

『無個性』それはつまり、読んで字のごとく個性を持たないものごと。

それを医者から告げられた瞬間、出久の心は確かにひび割れた。命の危険があるヒーローを目指すのに『無個性』は致命的だからだ。だが、それでも出久はヒーローを諦めきれなかった。それほど情熱を持ってしまっていた。

『無個性』というだけで現実はどこまでも彼に冷酷だった。持つものだらけのなかにいる唯一の持たざるもの。しかもそれがいい意味でも悪い意味でも無邪気な子供のなかであれば、からかいからいじめに至るのは当然だった。役に立たないと言う意味の『個性』と呼ばれるものもいたが、それでも『無個性』よりは扱いはマシである。かれらは少なくとも個性があることそのものは肯定された。しかし出久は常にすべてを否定され続けてきた。

勉強を頑張った。『無個性』のくせに上にいるのが気に入らないと言われた。

体を鍛えた。そんなことをしたところで無駄だと笑われた。

情報を集めて分析した。諦めろとノートを爆破された。

ヒーローを目指して生きてきた。来世に期待して身投げしてみろと言われた。

どんな努力も否定され続けてきた。

もう、限界だった。

涙で目の前がにじむ出久の脳裏に浮かんだのは性格は最悪だが根つからの悪人ではなく、頭がよく、強い個性をもち、それに溺れず体も鍛えている幼馴染み、爆豪勝己の言葉。

『そんなにヒーローに就きてんなら効率いい方法あるぜ』

『来世は“個性”が宿ると信じて…』

『屋上からのワンチャンダイブ!!』

かっちゃんの言葉が脳裏によぎる。本当に最低だと思う。僕の大事なノートを爆破した上に、あの言葉だ。本気で言ったわけではないにしろ、あれは立派な自殺教唆だろ。でも、どんなに悔しくたって僕が無個性であることは変わらない現実であるわけだし、そろそろ認めなければならぬのだろうか。

僕は…ヒーローには……。

…。

……。

……だめだ。やっぱり認められない。でも、疲れてしまったのも事実だ。今もこの手はノートを握りしめて離さない。この夢は決して諦めたくないけど、もう終わらせてしまいたい。

『屋上からのワンチャンダイブ!!』

……そうだ、いい方法があるじゃないか。うまくいけばヒーローになれるかもしれないし、かつちゃんに一泡ふかせてやれるかもしれない。もう疲れちゃったんだし、最後のチャレンジだ。

「君の言う通り、やってやろうじゃないか」

自嘲気味に微笑んで、早速屋上に向かう。かつちゃんはどんな顔するかな。罪悪感を

持ってくれるだろうか。もしそうならさあまあみろだ。一生無個性の僕に心を縛られ続けるといい。なんて普段の僕なら考えないことを柄にもなく考えた。

「……も、これで最後か」

妙な気分になりながら、階段を上っていき、屋上にたどり着いた。

「……っよし」

フェンスを登り、その上に立つ。風を感じながらふと今までを振り替える。

「散々だったなあ」

ヒーローに、オールマイイトに憧れて、無個性だと伝えられて、学校でかつちやんたちにさんざんいろんなことされて、担任の先生にも現実を見ろと言われて、僕の努力を認めてくれるのはいつだって母さんだけで、その母さんからもヒーローにはなれないと思われていて……。

「母さん……」

母さんの顔が、頭に浮かぶ。泣き顔だ。

『ごめんねえ出久……ごめんね……!!』

僕が無個性だとわかったあの日。超カッコイイヒーローになれるかと問いかけたとき、母さんが僕を抱き締めて涙を流しながらいった言葉。

僕があのととき言つて欲しかったのはそんなのじゃなかった。

だけどそれは今考えれば僕の気持ちであつて、母さんの思いはあのとときの言葉そのもので、それはずっと、まだ母さんのなかに残つてるんじゃないか？

また僕は、泣かせるのか……？

「ツーだめだ。やっぱり死ねない」

もうやめようこんなこと。諦めきれなくても、苦しくても、それは母さんを泣かしていいことにはならない。そう思って僕はフェンスから降りようとして……体勢を崩してフェンスの外側に落ちた。

落下しているその最中。ああやつぱり落ちるときは頭からいくのか、なんてバカらしいことを考えながら、目の前のすべてをスローモーションのように感じていた。これは、あれかな。極限状態での異常な集中力つてやつかな。なんて、そこまで考えたところで我に帰る。

今の状況は？…屋上から落ちている

このままだと？…死ぬ。

「ツ冗談じゃない！」

少し前ならまだしも、今はもう死ぬわけにはいかない。引き伸ばされた時間で考える。

(こわいこわいこわい死にたくない死ぬない死ぬない死ぬないどうするどうするどうするどうするどうすればいい!?)

堂々巡りの思考のなかで、ふと奇妙な感覚を感じた。体をなにかで包まれているような…というより、体からなにか出ていつているような…。そう思つて落ちながら器用に手を見ると、オーラのようななにかが手を包んでいるのがうつすら見えた。正直何かなんだかわからない。でも、感覚でわかる。これは僕の中から吹き出ているものだ。もつとしっかり見ようと集中する。オーラの色がだんだん濃くなり、はつきり見えるようになった。

本能的に直感した。一か八か、これを使うしかない。放出され消えていくオーラを体の周辺にとどめる。ただし、できるだけ厚く。限界まで体から、細胞一つ一つからオーラを絞り出して、体を覆うようにとどめる。

(体を包む。鎧のように！)

そして僕はオーラに包まれながら地面に直撃して、地面に小さなクレーターを作った。

「い、生き、てる…?」

驚くことに、無傷だった。地面がボロボロになって、疲労もすごいが僕は無傷。今も体の周りをオーラが取り巻いている。

「こ、これ…。もしかして、個性?」

これが始まりだった。この日の僕の選択が、僕のこれからの運命を大きく変えたんだ。

雄英高校ヒーロー科入学試験日。実技試験場。緑谷出久はそこにいた。

しかし、全くうまくいっていない。試験のスタートに出遅れ、さらには出てきた仮想敵に癖でびびった隙に他の受験者に横取りされて馬鹿にされる始末。

(バカ野郎!!何で動かない!思い出せ、死にかけてあの日を。この力を手に入れたあの日を!)

思い出すのはあの日。死の縁にいたあの瞬間。そのときの恐怖を思い出しながら前を見る。その視界に入るのは多くの受験者と仮想敵。

(あの時よりかは、全然怖くない!!)

出久はとりあえず念(出久は念じることで色々と応用が聞くことからオーラの力を『念』と名付けた)のオーラを身にまとい走り出す。試験前に転びかけて女の子に助けら

れたり、真面目でエリートな雰囲気の人眼鏡の人に叱られたり、スタートに出遅れたりと色々あって内心焦りまくっているが、とりあえず顔の表情だけでも落ち着いたふりをし、自分自身に落ち着けと言いつつ聞かせながら走る。その早さはすでに常人を越えたものだ。

そしてそのままフリーな敵を見つけ次第オーラをまとった腕で殴っていく。基本方針は常に見敵必倒かつ一撃必倒。殺ではないところが出久なりのポイントだ。そのままそれなりに順調に仮想敵を倒していると、爆音とともに辺りが揺れ、超巨大な仮想敵が現れた。それを見た出久がまず思ったことはただひとつ。

(でかすぎない!!?)

その後少ししてからいや、いくらなんでもこれはやばいでしょ。とか、こんな用意できるお金あるなんてさすが英雄!とか思いながらビビってパニックになり、逃げ出そうとした出久だったが、その瞬間ある光景を見つけ立ち止まる。その横を受験者たちが通りすぎていく。

女の子が、朝自分を助けてくれた女の子が逃げ遅れている。このままだと確実に危険だ。だが、他の受験者は誰も助けには入らない。

当然だ。あの巨大仮想敵は0ポイント。倒したところで何の意味もない。それぐら
いなら逃げながら他の仮想敵を倒した方が効率的だ。彼女を助けに行くのはただのタ
イムロスでしかない。助けにいく間に他の受験者は得点を重ね、順調にいった出久
の合格は危なくなる。というかほぼ確実に不合格になる。この試験に受かることは
ヒーローになるために必要で、棒に振ることなどできない大切なもの。それは出久も分
かっていた。

でも、それを見つけてしまった。

彼女の『助けを求める顔』を見てしまった。

だからこそ、頭で考えるより先に体が動いた。

オーラをまとった足で走り、全力でジャンプ。あり得ないほどの跳躍力で巨大仮想敵
に近づきながら、出久は体全体に『纏』ついているオーラを完全に『絶』ち、体内で『練』
り上げたオーラと今まで体を覆っていたオーラを右腕に集中させ、ただ全力で殴った。
勇気を振り絞り、自分の中の最大の憧れである『平和の象徴』の言葉を借りて。

「S M A A A S H !!」

その一撃はまさにオールマイトを彷彿とさせる超強力なもの。彼自身は預かり知らぬところなのだが、実は彼の念能力は強化系。すなわち、個性で言えば増強系であった。出久の一撃を受けた巨大仮想敵は粉碎され、その機能を停止した。出久は落下しながら女の子の方を見て、無事であることを確認した。

（よかった。）

先の一撃による反動はない。オーラによって攻撃力だけでなく防御力や治癒力も強化されていたからだ。出久はとりあえず女の子が無事であることと自分が無傷であることを安堵しつつ、ようやく自分が落下していることに気づく。

「や、やっぱああああ!!」

出久はとっさにオーラで体を覆った。怪我はしないことを知っているのにも関わら

ず叫んでいるのは彼の性格ゆえだ。そして落下中に女の子の個性にまた助けられ、出久の高校入試は終了した。

屋上から落ちたあの日が彼の運命の日とするならば、この入試の日が彼のヒーローになるための始まりの日。この日、確かに彼の物語は始まった。

ちなみにその後、入試に落ちたと思った出久が夕食の焼き魚に微笑みかけたり、入試に合格していたり、平和の象徴や担任の教師、No. 2ヒーローの息子に目をつけられたり、幼馴染みに絡まれたり、幼馴染みに絡まれたりするのだが……それはまた別の話。

緑谷出久は継承した

緑谷出久は継承した

学校からの帰り道、この超個性社会において珍しい無個性である少年、緑谷出久は自分の夢について考えていた。

『てめえが何をやるんだ？無個性のクセによ！』

学校で幼馴染みである爆豪勝己に言われた言葉。彼から言われたことと似たような言葉はいろんな人から何度も言われてきた。さすがにここまでオブラートなしで直球だったことは少ないが。ただ今回は長年ずっと嫌悪だけでなく羨望や憧れも同時に向けていた相手であったために、いつもより心にきた。

（わかってるんだ。無個性がヒーローを目指したところでもできやしないってことは）

（どんなに努力したって、強力な個性を持った人間には全くかなわないってことは、僕が

一番わかっている)

かつてアングラ系ヒーローのイレイザーヘッドを見たとき、体を鍛えて強力なサポートアイテムを使えば無個性でもヒーローになれるのではないかと考えたことがあった。だが、その後すぐに彼は個性を消す個性を持つていたのだったと気づいた。例え自分がどれだけ徒手格闘の達人になったところで、近づけなければ意味がない。敵が遠距離攻撃型や高機動型の個性持ちなら、それだけで接近するのが難しくなる。そう考えて、体を鍛えることさえやめてしまった。ちなみに裏の世界では無個性でも鍛え抜いた体で戦っている人物がいるのだが、一般市民の彼には知るよしもない。

(今僕がやっていることは、ヒーローのことをノートに書いているだけ……。)
(っ！だめだ。ネガティブ思考になりすぎてる。)

このままでは無駄に暗い気持ちになるだけだ。そう考えた出久は気分転換をすることにした。

(そうだ。あの人のところにいこう)

こうして出久は寄り道をする。数年前に出会った、今の自分にとってオールマイトや母親と同じくらい大好きな人物のもとへ。

奇しくもこの選択が彼の運命の分岐点となった。この寄り道によって出久はヘドロヴィランに襲われるという未来を避け、ヘドロヴィランはオールマイトにあっさりとペットボトルに詰められて警察へ引き渡され、オールマイトは自身の後継者を見つけることなく雄英高校に赴任する。

だがそれでも、世界は出久に力を得る機会を与えた。

暗い気持ちを引きずったまま、出久は目的地にたどり着いた。そこは普通の住宅街に不釣り合いな西洋建築の豪邸。一般庶民なら敷居が高く緊張してしまうであろうその家のチャイムを、出久は慣れた様子で押す。

「はい」

年老いた男性の声。温かさや優しさを感じられるその声に、出久は少し安心する。

「ティモツテオ。僕だよ」

「ああ、出久くんか。よく来たね。鍵は開いているから入っておいで」

出久は家のなかに入り、まっすぐにひとつの部屋を目指す。ドアを開けると白髪で優しげな顔つきをした老人が椅子に座っていた。

「こんにちは。ティモツテオ！」

「こんにちは出久くん。今日はどうしたのかな？」

出久は学校で少し嫌なことがあって気分転換に会いに来た、と正直に言う。ティモツテオはそうか、と微笑みながらお茶とお菓子を出久に出した。出久にとってティモツテオはおじいちゃんのような存在であり、ティモツテオにとつても、出久は孫のような存在である。

出久がはじめてティモツテオに出会ったのは公園で勝己たちにいじめられていた子を庇ってボコボコにされ、誰もいなくなつた後に通りかかったティモツテオに傷の手当てをしてもらったときだった。

手当てしてもらつた後に優しく話を聞いてもらい、家がそれなりに近かつたこともあつて出久はすぐに懐いた。

なによりも、自分の夢を否定しなかつたはじめての人だった。

『ねえ、ティモツテオ。ぼく、オールマイトみたいにみんなを救える超カッコイイヒーローになりたい。でもぼくは無個性だし、みんな無理だつて言うし、お母さんは毎回泣きそうな顔になるんだ…。ぼくは本当に、ヒーローを目指してもいいのかな……』

『出久くんはどうしてヒーローになりたいのかな？』

『どうしてって、えっと、それは…』

当時の彼はうまく言葉にできなかつた。ただオールマイトのようになりたいとばかり思っていた。

『なら、聞き方を変えよう。ヒーローになったらどうしたい？人気になりたいのか、お金を稼ぎたいのか、それとも他のことをしたいか』

『みんなを助きたい！』

『君にとつてのみんなは誰かな？』

『みんなはみんなだよ。お母さんとか、学校のみんなとか、町の人々とか……。あ、あ」とティモツテオもだよ！』

『……そうか。その気持ちを忘れなければ、きっと君は誰かのヒーローになれる。ヒーローを目指すのも諦めるのも、好きにしなさい。君の人生だ』

そのとき出久はとにかく嬉しかった。ティモツテオの言うヒーローが職業としてのそれを指しているわけではないことは幼いながらに分かっていたが、それでも構わなかった。肯定されたことそのものが嬉しかったのだ。

「それがかつちゃんのをやつ、雄英受けるなっていつてきて…」

「でも、そこまで言われても君はまだヒーローを目指すんだろう？」

「うん。やっぱり僕は困っている人を助けたいから。困っている人がいると、どんなに危険でも助けたいって思っちゃうから」

雄英受験はやめないし、例え落ちてもヒーローの夢は諦めない。結局はこの結論に行き着くんだなと出久はどこかおかしく感じながらも、やっぱりティモツテオと話してよかったと思ひ、笑みを浮かべる。

反対にティモツテオは厳しい顔でなにかを考え込んでいる。それに気づいた出久が心配そうな顔で見つめていると、やがてティモツテオはなにかを決心したように真剣な顔で出久に話しかけた。

「出久くん。君は雄英に受かるために、ヒーローになるために、命をかける気はあるか？」

「い、命って……。急にどうしたのさ、ティモツテオ」

「順番に話そうか。私の個性は知っているね」

「うん、昔見せてくれたよね。炎の個性だ」

出久は思い出す。たしかティモツテオの個性は炎が特徴的な個性だった。オレンジ

色の温かい炎。炎なのに触つても燃えない、ただ温かい炎。しかしティモツテオによれば敵をかき消すことも出来るらしい。ほかに物を凍らせたり、石化させたりしていた。

「……あの炎は確かに私の個性によつて出したものだが、私の個性の本質はこの体に流れる血」

「血……？」

「私の個性の名前は『ブラッド・オブ・ボンゴレボンゴレの血』。我が一族に代々血とともに形を変えることなく継承されてきた個性だ。その力の内容は大きく二つ。君に見せた死ぬ気の炎と、あらゆる物事を見透かす超直感」

「そ、そんな?! 個性を受け継ぐこと自体は珍しくないけれど片方の親の個性だけを受け継ぎ続けるなんて聞いたことがない何より形を変えることなくつてことはもう片方の親の個性と混ざるようなことも突然変異することもないつてことだし……」
(スイッチをいれてしまったか)

息継ぎもなしにブツブツと呟き続ける出久。ティモツテオはしまったと思いつつながら話を戻すことにした。

「続きを話していいかな」

「あつ、ご、ごめんティモツテオ」

「本来なら私の一族が自然に生まれ持つ個性だが、ひとつだけ血の繋がりが無い相手に与えることが出来る方法がある」

「っ！本当!？」

「本当。だが、この方法は一回きりであり、少しばかり問題がある。この個性を受け継ぐものには試練が与えられるのじゃ」

「試練……」

出久は自然と冷や汗をかく。ティモツテオの表情は今まで見たことがないくらい厳しいものだ。

「試練自体は私の血族であつても与えられ、この力を完全に受け継ぐに値するかどうかを試される。血族であれば、もし失敗しても不完全な力しか得られない代わりに、命は助かる。しかし他人に力を与える場合、試練に失敗してしまえば確実に死ぬ。」

「死……」

冗談とは思えないほどの声に出久は気圧される。

「命に関わることだ。本来なら受け継がせる気はなかった。子のいない私の代で絶えてしまっても構わないとも思っていた。だが、無個性でありながら人を助けたいと願う君を見て、もしかしてこの子ならと思った。受け継ぐかどうかは君次第だ。どうする？」

テイモツテオの話聞きながら真つ先に浮かんでいたのは恐怖だった。死ぬのが怖い。当然のことだ。

でも…。

でも僕はヒーローになりたい。ただ僕は無個性で、気持ちはあつたつてヴィランと戦うための力がない。つまりかつちゃんや他の雄英受験者と違ってマイナスからのスタート。スタートラインにすら立っていないんだ。

(こんなに大きな差を覆すなんて奇跡、命ぐらいかけなきや釣り合わない！)

「受け継ぐかどうかは君次第だ」

それに、そもそもヒーローになった人はそのときから命がけなんだ。

「どうする？」

(なら無個性の僕は、もっと前から死ぬ気にならなきや最高のヒーローになんてなれない!!)

「お願い、ティモツテオ。僕にその個性を受け継がせてください」

顔をあげて言い切ると、ティモツテオは目を見開いて驚いていた。

「即答、か。やはり君ならばと思ってしまっようよ」

するとティモツテオは血液の入ったアンプルを持つてくる。

「これはこの力を発現した初代の血だ。いつか血の繋がらない後継者候補が現れたときにと保管されてきた」

そして自分の指を軽く切り、血を数滴入れて僕に渡してきた。

「これを飲めば継承の試練は始まる」

「これを…」

「試練を受けた先達としてひとつ。自分の中の信念と覚悟を見失わないことだ」

僕はティモツテオの言葉を心に刻んで数秒ばかりアンプルを見つめ、意を決して一気に飲んだ。口のなか一杯に血の味が広がって気持ち悪いと感じたすぐあとに、異変は起きた。

「かつ、かはつ、ぐつがああ!？」

苦しい。その一言に尽きる。身体中が燃えるように熱くなつて、呼吸が難しくなり倒れる。浮遊感を感じたあとに柔らかさを感じた。ティモツテオがベッドに寝かせてくれたらしい。苦しさが強くなり、視界が霞む。やがて意識が途絶えて……。

気がつけば、僕は謎の空間に立っていた。目の前に複数の人影が現れる。人影たちの額にはオレンジ色の炎が灯っている。

「ボンゴレの血を継がんとするものよ。この血、この炎に秘められし業を受け入れることが出来るか？」

「受け入れる……。それが試練なのかでも業ってなんだろういやそれ以前にこの人影はなんだもしかしてこの個性は意思を持っていたりして……」

「……お前に見せてやろう。ボンゴレの血に伝わる過去の記憶を」

この個性のことが気になってついブツブツと考え込んでいた僕の額に人影の一人の手が添えられる。

そして僕は、地獄を見た。

人が燃やし尽くされた。人が石になって砕かれた。人が撃ち殺された。人が人が人が人が…

「やめろ！ まで、殺すなよ!!」

「我らの力は隠されなければならぬもの。強力である上に、子を作ればその子供は100%の確率でこの力を受け継ぐ。さらには継承に失敗した不完全な力でも十分な強さを得ることが出来る。ゆえに秘密を知ったものや一族での裏切り者は消し去らねばならない」

「この業を受け入れるか？」

受け入れればきつと継承できる。僕が誰にも話さなければきつと人を殺さなくてもいい。簡単だ、認めろよ。そうすれば個性が手にはいるんだ。

『自分の中の信念と覚悟を見失わないことだ』

「……できない。僕はこんなこと、認められない！」

「なっ、拒むというのか!?!力を求めておきながら！」

「僕は最高のヒーローになりたいんだ。こんなことを認めてちや、誰も助けることなんてできないじゃないか!それは僕の目指すヒーローじゃない!こんなことしなくちや手に入らない力、僕はいらない!!」

言った。言つてやった。

だけどこれで継承は失敗だろう。ごめんなさいティモツテオ。ごめんなさい母さん……。そんな風に心のなかで謝っていると、今まで黙っていたマントを着けた人影が話しかけてきた。

「継承しなければ死ぬのだから」

責めるわけでもなく、心配するような、でもどこか嬉しそうな声で確かめてくる。優

「継、承……？僕がもらってもいいんですか!？」

「ああ。X世^{デーチェ}、お前が勝ち取ったお前の力だ。その力でお前の言う最高のヒーローになってみせろ。俺たちはお前の中で見守っている」

努力を、夢を認めてもらったことが嬉しくて涙が止まらない。それでも確かに返事をした。

「……はいっ。絶対に、なって見せます!」

これが僕の原点^{オリジン}。ここから僕のヒーローへの道が始まるんだ。

その後、個性を使うとなんだかクールな感じに性格が変わることが発覚した出久。彼は色々大変な学園生活を送ることになる。

「両手からの死ぬ気の炎を、推進力に!」

「おいクソデクウ! てめえ勝手に俺の爆速バクンじゃねえ!!」

「許可をとればいいのか？」

「そういうこと言ってるじゃねえよ死ね！」

ビリは除籍の個性把握テストから始まり……。

「頑張ろうねデク君！」

「う、うん。よろしく麗日さん」

『それではAコンビ対Dコンビによる屋内対人戦闘訓練スタート！』

（よし、死ぬ気でいくぞ）

（あつ、デクくん炎でた）

「いくぞ麗日」

「急にめっちゃクールや！」

最初の戦闘訓練

「死ぬ気のゼロ地点突破！」

「まじかよ……。脳無が全身凍りつきやがった。聞いてねえぞ先生、対平和の象徴じゃね

えのかよっ」

「もう、その氷が溶けることはない」

「もう大丈夫、私が来…ってええええ!! もう終わってる!」

U S Jでの襲撃

「緑谷ちゃんって、個性使うと轟ちゃんみたいな性格になるわよね」

「あはは…」

まさかのキャラ被り！出久の明日はどっちだ!?

緑谷出久は継承した 2

四月。子供たちが進級、入学して新たな環境へと進んでいく、出会いと別れの時期。出久もまた自分の通うことになった高校である雄英高校に、少しの不安と大きな期待を感じながら通学しようとしていた。

忘れ物がないかもう一度確認し、ポケットに手をいれて取り出したのは銀色の懐中時計。雄英高校の合格祝いとしてティモツテオから送られたものだ。とても高価なものなはすぐにわかったので受け取れないと言ったのだが、君のために用意したから受け取れないなら捨てると言われては貰うしかなかった。

時計を眺めながら、もらったときの言葉を思い出す。

『いいか出久君。時間を大切にするんだ。ブラッド・オブ・ボンゴレは縦の時空軸、すなわち時を司り、その力は時に奇跡を起こす。継承した者の思念が血に宿り次代へと受け継がれるのもその一つだ』

『君の人生の全てはその血に刻み込まれていく。その血を次の世代に伝えるかどうかは君次第だが、それに関係なく一分一秒を大切に、できるだけ後悔なく生きなさい』

テイモツテオの言葉を今一度胸に刻んで時計をポケットにしまうと、出久は心配と喜びをないまぜにしたような表情の母に声をかけた。

「それじゃあ、行つてきます！」

「出久！」

「なあに!？」

「……超かつこいいよ」

目にうつすらと涙を浮かべながら言う母に、出久はとびきりの笑顔で答えて雄英へと向かった。

雄英高校ヒーロー科の一般入試の定員数は36人、そこに推薦入試組が加わりおおよ

そ20人ずつの2クラスに別れる。出久のクラスはA組だった。

「えーっと、1のAは……あつた。ここか」

自分のクラスの教室にたどり着くと、目についたのは大きなドア。出久は少し驚いたが体の大きい異形型個性の持ち主のためのバリアフリーかとあたりをつけて、ドアを開ける前にまず深呼吸をひとつ。

「怖い人たちとクラス違いますように……」

常時イラついている幼馴染みと、入試のときに出久を何度も叱つた眼鏡の人物を思い浮かべつつ、入り口のドアを開けた。

「机に足を掛けるな！雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないか!？」

「思わねえよ！てめえどこ中だ端役が!!」

（ダブルで同じクラス!!）

「ぼ……俺は私立聡明中学出身、飯田天哉だ」

(素直に答えるんだ!?)

ドアを開けた瞬間目に入った2トップに出久は放心ぎみになりながらも内心で逐一ツツコミをいれる。二人はそのまま騒いでいたが、眼鏡をかけた生徒、飯田天哉がドア付近で立ち尽くす出久に気づいて近づいてきた。

「おはよう！俺は「きいてたよ。僕、緑谷出久。よろしく飯田くん」

「緑谷君、君はあの実技試験の構造に気付いていたのだな。俺は気付けなかった。機動力も素晴らしかったし、君を見誤っていたよ。悔しいが君の方が上手だったようだ」

どうやら入試で女子生徒を助けたことをいつているらしい。しかし、救助ポイントの存在など全く気づいていなかった出久としては苦笑いだ。出久がどう言葉を返そうかと悩んでいると聞き覚えのある女子の声が聞こえてきた。

「あつそのもさもさ頭は！地味めの！」

「んな!?!」

(すっごいナチュラルにデイスられたー!?)

満面の笑みで放たれたまさかの言葉に面食らう出久。本人には悪気がないということとはわかるが、やはり心にグサツと来る。なにより地味めのもさもさ頭という言葉で自分のことだとすぐに分かってしまう分いたたまれなさは割り増しだ。

「やっぱり受かったんだ！そりやそうか。あのパンチと炎すごかったもん。でもやっぱり個性使ってたときと感じ違うね」

「いや、それは、その。……？」

話しかけてきた女子生徒、麗日お茶子と少しの間雑談していた出久は直感的に妙な気配を感じた。場所はおそらく麗日の足元。そのまま出久が下に目を向けるとそこには細長く黄色い何か、具体的には寝袋に入って横たわる 男性がいた。

「ほう。俺に気づいたか」

（(なっ。なんかいるー!!)）

「だけど静かになるまで8秒かかりました。時間は有限。君たちは合理性に欠けるね。お友だちごっこがしたいならよそへ行け。ここはヒーロー科だぞ」

ぬっと寝袋からでた男は黒ずくめの格好をしていた。言葉からして教師でありプロヒーローのはずだが……。

(こんなくたびれたヒーロー見たことない…)

「担任の相澤消太だ。よろしくね」

自己紹介をかなりあつさり目にすませると相澤は驚く生徒たちをスルーして体操着を取りだし、着替えてグラウンドに出るように指示して去っていく。残された生徒たちは困惑しながらも指示どおりグラウンドへと向かっていった。

「個性把握テスト!?!」

僕たちがグラウンドで伝えられたのは個性把握テストをするということだった。入学初日に真つ先に行うことがこれというのはさすがに常軌を逸している。

「入学式は？ガイダンスは?!」

「ヒーローになるのにそんな悠長な行事に出る時間ないよ。雄英は自由な校風が売り文句。そしてそれは先生側もまたしかりだ」

麗日さんの質問をバツサリと切る相澤先生。少し合理的さを求めすぎているような気もするけれど、たしかに先生の言葉は一理ある。僕は最高のヒーローを目指すんだから悠長になんてしてられない。

「お前たちも中学の頃からやつてるだろ？個性禁止の体力テスト。国はいまだに画一的な記録を取って平均を作り続けている。合理的じゃない」

まつ、文部科学省の怠慢だなどこぼしながら相澤先生はボールを取り出してかつちやんを呼び、前に出るように言った。

「爆豪。お前中学のときソフトボール投げ何メートルだった？」

「67メートル」

「じゃあ個性使ってやってみろ。円から出なきや何してもいい。はよ。思い切りな」

そう言っただけボールをかつちゃんに渡すと相澤先生は下がっていった。なるほど、このテストは個性ありきの超人的な記録をとって、個性の内容だけじゃなく制御具合や応用力などを見るためのものなんだ。

「んじゃまあ……死ねえ!!」

（死ね？）

投げる瞬間かつちゃんの手から爆発が起こった。それによってボールは爆風と共に彼方へ飛んでいく。それにしてもかつちゃんは相変わらずというか……。無機物相手に死ねとかもはや意味がわからない。ただそれでもやっぱりかつちゃんはすごい。705.2mという大記録を出した。

「まず自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

目の前で出された記録に生徒たちが興奮する。個性を思いっきり使うことが出来るということもあつてか面白そうと言う人もいたけど、僕は気を抜いていられない。何せみんなと違って僕は個性を手に入れてから10ヶ月くらいしかたつてないんだ。

ティモツテオとの猛特訓でかなり使えるようになったとはいえ、あの奥義は未完成な上にその他の部分もまだ向上の余地がある。今の僕の最大限を確かめないと。そう一人で決意を固めていると、先生の雰囲気が変わった。

「面白そう、か……。ヒーローになるための3年間そんな腹積もりで過ごす気にいるのかい？」

そして言い渡されたのは、最下位は見込みなしとして除籍処分にするというものだった。

「生徒の如何は俺たちの自由。ようこそ。これが雄英高校ヒーロー科だ」

なんて理不尽だ。みんなもそう思ったらしく抗議の声が出るけれど無駄だった。そ

して先生は言う。自然災害や大事故にヴィラン。世の中は理不尽にまみれているのだと。

「これから3年間雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける。更に向こうへ…」 Plus Ultra さ。全力で乗り越えてこい」

緩んでいたみんなの心が緊張感で張り詰めた状態になったのがわかる。いたずらに不安を煽って浮き足立たせるのではなく、みんなのやる気を起こさせて覚悟を決めさせた。見た目はあれでもやっぱりこの人はプロなんだということがよくわかった。

「さて、デモンストレーションは終わり。こっからが本番だ」

そうして個性把握テストは始まった。まず最初は50m走だ。飯田くんの個性はエンジンだそうで、水を得た魚とばかりに駆け抜けていた。記録は3秒04だ。そのほかにも蛙のようにぴよんぴよんと跳び跳ねている人や素で身体能力が高い人、さらにはレーザーで飛んでいく人など、もはや走ってすらいない人もいた。だがそれも許されていたということは文字通りなんでもありなんだろう。だったらあれをやっても問題な

い。そろそろ僕の番が近づいてきたし、準備することにしよう。

目を閉じて僕自身の心の奥底にある意思を自覚し、覚悟をきめる。

雄英に入学して初日で除籍なんて冗談じゃない。僕は最高のヒーローになるんだ。
だから…。

「最下位を回避しなければ、死んでも死にきれない！」

ボウと僕の額にオレンジ色の炎が灯る。思考がクリアになり、体は軽く、心も落ち着いていった。

目の前で起きた出来事を、突如出久の雰囲気が変わったと思ったら額に炎が灯ったというその光景を、勝己は初めは理解できなかつた。いや、理解したくなかつた。

なぜ、あの出久が静謐な雰囲気をもとっているのか。

なぜ、額に炎が灯っているのか。

なぜ、その瞳には確かな自信が宿っているのか。

(個性だったのか…？そんなはずねえ！個性の発現は四歳までのはずだ)

出久は無個性だ。無個性のはずだ。いつも自分に何をされても反抗できてなかったではないか。そんな思いが勝己のなかに浮かんできてる。だが個性でなければ目の前の光景に説明がつかない。勝己は認めた。非常に不本意だが確かに認めた。緑谷出久には個性がある。

そして認めてしまったその瞬間、勝己の中のなにかが切れた。

「どーいうことだコラー！ワケを言えデクてめえ!!」

感情の赴くまま叫びつつ、手加減などせずに個性を発動しながら出久に飛びかかった。出久は勝己の声に振り向くと、迫り来る勝己に鋭い視線を向けてオレンジ色の光を放つ左手で迎え撃とうとする。そして勝己の右腕が振り下ろされようとしたその瞬間…。

唐突に個性の爆発が止み、勝己は相澤の持つ長い布で動きを止められていた。

「なっ。なんで爆発しねえ……!?」

「個性を消した」

静かに、だが確かな威圧感を放ちながら相澤が言う。その言葉を聞いた出久が相澤の
「グーグルに目をとめ、なにかを思い出したかのように口を開いた。

「個性の抹消……あのグーグル……。っ！抹消ヒーローイレイザーヘッドか」

「ったく……。こんなことで個性使わせんな。俺はドライアイなんだ！」

（個性すごいのもったいない！）

「なにか因縁があるようだが授業中に暴れるな。二人とも早く位置について始めろ。時間をもったいない」

「チッ」

相澤の言葉に出久は素直に従い、苛ついてはいるが冷静さを取り戻した勝己は舌打ちしながらも従った。

位置についた出久はスターティングブロックを気にせず立っただままで両手を目の前に持つてくる。そして両手がオレンジ色の光を放った次の瞬間、出久の両手が炎に包まれた。

用意の指示と共に出久は炎の特徴と使い方を脳内でおさらいしていく。

(死ぬ気の炎はそれぞれのもものが熱をもった超圧縮エネルギー。僕の大空の炎は七属性随一の推進力を持つ。そして純度の高い色鮮やかな炎ほど属性の持つ力を強く引き出す。)

出久の炎が鮮やかな赤に近いオレンジ色になった。この炎は高純度かつ高出力だが制御の難しいじやじや馬だ。出久は通常の炎を柔の炎、この炎を剛の炎と呼んでいる。

スタートの合図が鳴った。勝己が走り出しながら両腕を背後に突き出す。出久は軽く前方にジャンプしながら両手を背後に向け、炎を噴出させた。

「両手からの死ぬ気の炎を、推進力に…!」

「爆速…ターbっ!?!」

掌から起こす爆発で加速しようとしていた勝己の隣を超速で出久が通り抜けた。勝己は予想外の速度に驚きながらも動きを止めることなくゴールする。

その結果、出久が2秒48。勝己が4秒13だった。記録的には勝己の大敗なのだが、勝己が苛ついたのはそこだけではない。

「おいクソデクウ！てめえ勝手に俺の爆速。パクんじやねえ!!」

推進力としていたものが炎か爆発の衝撃かの違いはあるものの、はっきり言えば被っていた。出久からすれば真似したつもりは全くないが勝己は納得しないだろう。

どうするか、と考えたところで出久はふと気づく。勝手にということとはもしかして…。

「…許可をとればいいのか？」

「そういうこと言ってるんじゃないやねえよ死ね！」

（キャラ違うっていうか、意外と天然…？）

豹変した出久にクラス全員が戸惑う。勝己でさえいつもと違う出久の様子に調子を

狂わされたのか、舌打ちしながら離れていった。

出久は額の炎を消すと、ひとつ息を吐く。

「ふう。な、なんとかなった。でもやっぱり剛の炎の制御が甘いな。制御しようとして出力も低かった。でも出力を上げすぎるとブレーキが大変になるし。いやでも最高出力を一瞬だけ出せたら瞬間移動みたいなことも……」
(キヤラ違いすぎる。なんなんだこいつ……)

ブツブツと呟きながら考察する出久に若干引き気味の生徒たちをよそに個性把握テストは続く。

次の種目は握力だ。触手を複製できる個性をもつ生徒が540kgという記録を出していたが、出久にはそんな個性はない。

(今の僕に握力を上乘せする方法はない。でも底上げならできる)

出久は再び額に炎を灯す。超死ぬ気モードの出久は全身のリミッターを外した状態であるため、身体能力が底上げされている。出久はこの状態に耐えるために入試までの

10ヶ月間で必死に体を鍛え上げた。

「……くぐぐ」

記録は235kgだった。

第三種目の立ち幅跳びは炎を使って飛んだのだが…。

「なあ、緑谷のやつ…。何処まで行くんだ…？」

「もう見えなくなっちゃったわね…」

赤毛の少年、切島鋭児朗の発言に蛙のような少女の蛙吹梅雨が答える。口には出さなかったが今の状況に対してクラスの全員の心情はひとつであった。

つまりは、どうすんだこれ…というものである。

「あつ、あれ！デク君帰ってきた！」

しばらくした後、飛んで帰ってきた出久に麗日が気づいた。出久はスタート地点まで

戻ってくると、着地することなくホバリングし、口を開く。

「……………すまない。少し行きすぎた」

(絶対少しじゃない!!)

「緑谷。お前いつまで飛び続けられる？」

「…気力が続く限りいつまでも」

「そうか。それじゃ…」

相沢は出久の答えを聞くと手元の機械を操作し、結果を表示する。記録は∞だった。

緑谷出久は理解した 緑谷出久は理解した

燃え盛る炎のなかで、無個性の少年緑谷出久は走っていた。

「バカ野郎！やめろ!!」

「止まれ！止まれー!!」

辺りからは制止の声。目の前にはヘドロのようなものに飲まれかけながらも必死に抵抗している幼馴染み。

(何で出た!?)

自分でも自分の行動がわからない。ただ、内心で疑問の声をあげながらもその足は止まらなかつた。ぐちゃぐちゃな思考のなかでもヘドロのウイルスに対抗する方法を考え、自分のノートにまとめていたヒーローたちの戦闘方法の中から今の自分に出来そう

なものを思い付いた。

そしてヴィランに自分のリュックを投げつけて怯ませ、なんとか幼馴染みを救い出そうと掴めるはずもない泥の体を掴もうとする。

「なんででめえが！」

（色々理由はあつたと思う）

目の前の幼馴染み、爆豪勝己とは色々あつた。彼は昔から出久に意地悪だったし、出久が無個性と判明してからは扱いはより酷くなった。それでもなんでもできる彼に出久は憧れたし、彼がヒーローになるために体を鍛えたりしていると知ったときは素直に尊敬して、出久も真似して鍛え始めたりもした。

けれど……。

（だけど、ただその時は）

「君が！助けを求める顔してた!!」

その言葉を聞いた瞬間、勝己の顔が大きく歪んだ。そして同時にヘッドロヴィランの声

が響く。

「目障りなガキがア！」

勝己を乗っ取ろうとするヴィランの力が強まり、それに対する勝己の抵抗も強くなる。それによって勝己の個性の制御が甘くなった。

その結果……

今までで最大威力かつ最大規模の爆発が起こり、出久は至近距離でそれを受けた。

一瞬の浮遊感と共に出久を襲うのは熱さと激痛。自身が耐えられる限界を越えたそれを感じて、出久の意識はだんだん薄れていく。

（痛い。体が動かない。感覚もなくなっていく……。僕きつと死ぬんだ。そっか、これが……死か）

そして出久は完全に意識を失った。

次に目を覚ましたとき、出久は病院にいた。自分が生き延びていることに疑問を持ちながら母に抱き締められ、医師からオールマイトによって事件は解決し、自分は奇跡的に助かったのだと教えられた。

今回の事件についてマスコミはヒーローの質の低下が少年の無謀な行動を起こしたと騒ぎ立てた。

噂の渦中にいるということで、出久は念のため面会謝絶になっており、今は母ぐらいしか見舞いに来ない。しかしそれは出久にとつて都合良かった。というのも、怪我の後遺症なのか、視界が少しおかしくて会話に集中できない。

端的に言えば、あらゆる物に線が見える。病室の床や窓際の花瓶からその中に生けられている花まで、ありとあらゆるすべての物に黒い線が見える。もちろん人も例外ではない。

不思議に思った出久は、医師と母に相談した。だが、医師が言うには手術は成功しているし、後遺症などないはずとのこと。ならばこれはなんなのか。医師の仮説はこうだった。

「命の危機に瀕して、個性が目覚めたのではないでしょうか。恐らくは過去視や未来視などと同じ、なにか特別なものを見る個性が」

これには出久も母も喜んだ。幼い頃からの夢であるヒーローへの道が開けたかもしれないからだ。そして医師の立ち会いのもと、実験が行われた。内容は簡単で、要らなくなった椅子の線をなぞってみると言うもの。出久が線をなぞってみると、その線に沿って椅子はバターののように切り落とされた。そのあとは石、鉄とどんどん材質を変えていく。どれも簡単に切れた。

「先生。息子の個性は何なのでしょうか」

「恐らく、切断ではないかと。強力な個性ですよ」

両親も医師も出久を祝福した。強力な個性が目覚めてよかったね、と。

しかし出久は喜ばなかった。自分の個性がもつと違う何かであるような気がして。恐ろしくて。

(違う。分からないけどたぶん切断なんかじゃない。もつと危険な何かだ)

出久は自分の能力を判明させるために次の実験を行うことにした。花瓶の中の花にある線をただなぞるのではなく、線が重なっている部分についてみたのだ。

震える指先で花に触れると、花が死んだ。

普通に見れば『枯れた』なのだが、そのとき出久は『死んだ』と思った。そして出久は理解する。

「こ、れ。この、線は……『死』だ」

そこから出久の日々は地獄になった。出久の目に写るのは死の概念に満ち溢れた世界。頭に浮かぶのはそれに触れば容易く殺せてしまうと言う事実。出久の精神は追い詰められていく。

そして精神が限界を迎えたその日、出久は自分の目を潰した。それでもまだ、線だけは感じ取れた。

「う、あ、ああ、ああああああ!!」

痛みなど気にならなかつた。線を、『死』を感じることに耐えられずに暴れまわる。異変に気づいた看護師や医師、そして母が駆けつけ、出久を押さえつけて麻酔を打とうとした。

「全力で押さえろ！思ったより力が強い！」

「出久落ち着いて！出久!!」

「違う！僕が欲しかったのはこんな力じゃない!!いやだ、いやだもう見たくない!!」

なんとか出久を眠らせた医師たちは、その後さらに驚くことになる。数日で目が再生したのだ。出久の精神状態が心配され、隔離しようと言う意見まで出たが、予想に反して出久は落ち着いていた。だが次第に出久が頭痛などの不調を訴えるようになった。

様々な検査が行われ、結果は…。

「正直、普段出久くんがどんなものを見ているのかは分かりません。ですが、脳に負担がかかりすぎている。この調子なら二十歳を迎える前に死んでしまってもおかしくない」
「そんな…。そんなことって…。う、嘘でしょう先生。息子が、出久が成人前に、なんて

……」
「残念ですが……」

医師の言葉に出久の母は泣き崩れた。出久はただそれを虚ろな目で見ていた。

こんな状況になって、僕は自分のことを考えることが増えた。相変わらず視界は死で溢れてる。この光景にもう僕は慣れてしまった。きつとどこか壊れたんだろう。たぶん正気ではないと思う。この先どうしようか。このまま死んでしまってもいいかも。少なくとも死は怖くなくなってしまった。

面会謝絶の札はもうとれてるのに、母以外はやってこない。いや、プロヒーローは何人か来たか。全員僕を怒っていったけど。彼らの表情から察するに、僕はヒーローたちの立場を悪くした厄介者らしい。ぼんやり考えていると、ノックが聞こえた。

「はい」

ドアが開けられ、意外な人物が現れた。

「わーたーしーがー、トゥルーフォームで来た！」

「……オールマイト」

やはりファンだからだろうか、なんだか少しだけ気分がよくなった。

「やあ、緑谷少年。調子はどうだい？」

「もう体はずいぶん良くなりました。顔の火傷の痕は、もうとれないみたいですけど」

それを聞いたオールマイトは少し表情を曇らせる。そして、突然土下座した。

「……緑谷少年。本当にすまなかつたっ!!」

「えっ。ちよつと、やめてくださいオールマイト！」

さすがに驚いてしまう。まさか土下座されるなんて思わなかった。

「あるとき私がつと早く決断していれば……。君を救えた。プロはいつだって命がけだと、そう君に言ったのは私だというのに……。」

「顔をあげてください。オールマイトには時間制限があったじゃないですか。愚かなことをしたのは僕なんだ。僕はヒーローたちの立場を悪くしただけだった。ヒーローとはほど遠いことをしたんだ」

「それは違う。緑谷少年、小心者で無個性の君が行動したからこそ私は心動かされた。」
「トップヒーローは学生時から逸話を残している。そして彼らの多くが話をこう結ぶ。考えるより先に体が動いていた、と。あときの君はまさにそうだったはずだ」

「あの事件の後から、ずっと君に言いたかった。緑谷少年、君はヒーローになれる!!」

自然と涙が流れていた。憧れのヒーローにずっと言っていた欲しかった言葉を言われたことが嬉しくて。そして、言ってくれたことがもう不可能なことだと分かってしまつて、悲しくて。

「君なら私の力を受け継ぐに値する」

そしてオールマイトは自らの個性の秘密を教えてくれた。『ワン・フォー・オール』聖火のごとく引き継がれてきた個性。

「ずっと後継を探していた。そして君になれば託せる。君の体はよく鍛えられているし、今すぐにでも受け継ぐことができるだろう。使いこなすには時間が必要だがな。それで、どうする？」

……答えはもう決まっている。

「ごめんなさい」

「即答で拒否!? わ、訳を聞いても？」

僕は自分の個性のことを話した。僕の見る世界のことやこの個性が常時発動型であること、そして寿命のこと。

「あなたはヒーローになれるっていつてくれたけど、無理なんです。この力は手加減が

難しいんだ。僕の眼は生きているなら神様だつて殺せてしまう、そんな個性だから。それに何より僕には時間がない。短命の僕が受け継いだところで、高校を卒業する頃には次の後継を探さなきゃいけないくなる」

「緑谷少年……」

「ねえオールマイト。僕は残された時間で何をすれば良いのかな」

「ねえオールマイト。僕は残された時間で何をすれば良いのかな」

緑谷少年の眼は光を写していなかった。やはり私は間に合わなかった。全てが遅かった。彼を助けに行くという決断も、彼にヒーローになれると伝えるのも、なにもかも。

彼は私を責めなかった。彼の母親もだ。ここに来る前に彼の家にも行ってきたが、彼の母親は私を責めなかった。私に対して怒りを抱いていたはずなのにそれを飲み込ん

で、それどころか礼をいつてきた。

このままではいけない。私はまだ彼を救えていない。それなのに許されてしまうなどあり得ない。私は彼の心を救わなければならぬ。だって彼は私を応援してきてくれたファンであり、私はNo. 1ヒーローで平和の象徴なのだから。

「これまでの君の夢はヒーローだった。だがそれはヒーローになることで終わりではなかったはずだ。ヴィランに立ち向かって行ったあのとき、君の頭にあったのは人を助けることだけだった。そうだろう？」

「人を、助ける」

緑谷少年の目にわずかに光が灯る。緑谷少年と私の心はきつと同じであるはずだ。だって彼は昔の私に似ているのだから。

「職業としてのヒーローにはなれないかもしれない。でも困っている人を助けることはできる」

「僕にできるかな…」

「できるとも！」

笑顔で緑谷少年を見つめる。すると緑谷少年も笑ってくれた。…よかった。彼の立ち直った様子に安心する。

だからだろうか、私は大事なことを伝え損ね、あまつさえ余計な一言を言ってしまった。

「君の個性だって、きつと人助けに使うことができるはずだ！」

ヴィランを倒すことだけが人助けではない。このとき私はそう言うべきだったのだ。私はこのときのことを、一生後悔することになる。

やっぱりオールマイトは最高のヒーローだ。僕に道を示してくれた。ヒーローになれずとも一人でも多くの人を助ける。それがこの命尽きるまで僕がやらなきゃいけない

いことだ。

僕の個性はヴィランに手加減するのが難しい。場合によってはヴィランを殺さなきゃ人を救えない。なら、そうしよう。これなら人を助けられる。

人を助けるために人を殺す。ヴィランとほぼ同類の存在になる。以前の僕なら絶対許容できなかったのに今は普通に受け入れることができた。やっぱり僕はどこか狂っているらしい。

だからもう、ここでみんなとはお別れだ。

その日、とある病院から一人の少年が消えた。

世論がヒーローを叩く方向にばかりいったためにそう騒がれることはなかったが、少年の失踪は、少年に関わっていた数人の心に確かに傷跡を残す。

それから少し後、『死神』と呼ばれる存在が現れた。

彼は主にナイフや刀などの刃物を使い、鉄をも切り裂きどんな個性でも永久に抹消する力を持つ。

最も特徴的なのは、市民の救出を最優先し、どんなヴィランでも必ず一度だけ自首を促すことだ。それに応じたものは助かり、拒否したものや自首するふりをして逃げよう

としたものは個性を抹消されるか殺されるといふ。

まるでヒーローのような行動に賛否両論の声があがり、彼が現れた町はヴィランの被害件数が大きく減るため、一部では彼を称えるものまで出始めた。

そして『死神』はやがてヒーローの卵たち、ひいては平和の象徴と関わっていくことになる。

「あつ、ひ、久しぶりかつちゃん。また一段とヴィランっぽくなったね」

「うっせえよ誰がヴィランだ!!」

(爆豪にビビってるわりに辛辣!?)

「テメエ何で勝手にいなくなりやがった! 訳を言えデクウ!!」

「いや攻撃しながら聞かないでよ!」

「緑谷少年、君がこうなったのは私のせいだ。だから私が君を止めてみせる!」

「ごめんオールマイト、僕は止まらない。少なくとも最大の悪、オールフォーワンを殺すまでは!」

「オールフォーワンだど!？」

「何で左側を使わないの？君の力だろう？」

「俺、の……」

「言ったよねステイン。僕の周りでヒーローは殺させないって」

「君は……!」

「ハア……。やはりお前のようなものこそ英雄とされるべきだというのに……」

たぶんつづかない。

緑谷出久は理解した 2

4月。新入生が入学し、ようやく雄英高校での新生活になれてきはじめた頃にそれは起きた。昼休み、生徒たちや教師陣が午前中の授業を乗り越えて美味しい昼食を食べながら、各々好きなように過ごしているなかで、唐突に警報が鳴り響く。雄英のセキユリティを突破して侵入したものがいたらしい。

校門では大勢のマスコミがぞろぞろと侵入してオールマイトを出せと騒いでいる。教師陣はマスコミの対応で手一杯。生徒たちは一人が非常口の標識と化し、その他の者は一斉に避難していた。そんないろんな意味で混沌とした状況のなか、この混乱に乗じて自らの目的を果たした者達があった。

ある者は雄英の今年の新入生たちのカリキュラムという襲撃の計画を組み立てるための材料を手にいれ、またある者はそれを眺めて自身が追っている相手が次にどんな手を打つつもりであるのかを悟った。

「やつの手駒の今回の狙いは雄英の新入生のカリキュラムだった。つてことはやつぱりあいつはオールマイトを狙っているわけだから、このスケジュールだとあいつが手を出してきそうなのは……」

なにやらブツブツと呟きつつ手元の紙を眺めながら、フードを目深に被った少年が町を歩いていた。通りすぎていく人々は若干引いているが、集中している少年は気づかない。そのまま少年は裏路地の方に歩いていく。人気の無い裏路地の一角にある自分の今のアジトにたどり着くと、少年、緑谷出久はフードを取って座り込んだ。

「はあ…。まさか憧れの雄英にあんな形で入ることになるなんて思わなかったよ。気配は完璧に消してたけど長居するわけにもいかなかったし…。ああもう！もつとじつくり見学したかった!!」

出久が病院から抜け出してもう10ヶ月ほどが過ぎ、その10ヶ月で味わった裏の世間は出久を大きく成長させていた。実戦で何度か死にかけながら高いレベルの対人戦

闘などの技術を身に付け、色々な方面の人脈を得たことによって生活も少し安定してきた。

ひとしきり愚痴った後、出久は今回の敵の動きを脳内でまとめてその先を思考する。

今回の敵の動きから見て、次に巻き込まれるのは新入生。それも恐らくA組だろう。潰しやすいヒーローの芽は潰しておきたいだろうし、オールマイトの精神にもダメージを与えられるからほぼ間違いない。あとはヤツの情報から考えて、使えそうな個性の選別をかねている可能性もある。と、そこまで考えてふと思う。新入生のA組ということは……。

「絶対いるよなあ……かつちゃん」

もちろん入試の結果など知らないが、自らの幼馴染みが雄英の上位にいることは出久にとってほぼ確定した事実であり、何の疑いも持っていない。あの幼馴染みはいろんな方面で優秀だったのだから、受かるくらい当然だろうというある種の信頼があった。

しかし問題はそこではない。問題は会ってしまったときである。あの幼馴染みは基本的に沸点が低いが、出久に対しては常温より低い。ほぼ常に沸騰している。半年以上も失踪しているのに唐突に顔を出せば、色々んでもないことになるのではないのか。

さらには今の出久の顔にはあの事件での火傷の痕が残っているということもあって、単純に顔を会わせづらい。だが、実のところ出久の心は決まっていた。

「まあ、行くしかないかな。一人でも多くの人を助けたいし、かつちゃんが襲われるのはなんか気に入くない」

雄英高校の演習場のひとつ、ウソの災害や事故ルームにて1年A組の生徒たちは唐突なヴィランの襲撃に驚いていた。イレイザーヘッドこと相澤と13号が警戒し、生徒たちも緊張するなか、敵のリーダー格と思われる身体中に手をつけた男、死柄木弔と黒いモヤでつまれた男、黒霧が話している。どうやらオールマイトの命を狙っており、いないことに落胆していたらしい。

「——子供を殺せば、くるのかな？」

死柄木のその一言に生徒たちが身構え、状況把握を始めると、相澤が指示を出してヴィランの集団に突っ込んでいった。相澤が戦っている傍らで黒霧が生徒たちのもとに現れる。

「はじめまして。我々は敵連合。僭越ながらこの度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせていただいたのは平和の象徴オールマイトに息絶えていただきたいと思つてのことです——ガアツ!？」

黒霧が話している最中、唐突に何者かが猛スピードで襲いかかり、黒霧が蹴り飛ばされ、中央広場まで落ちていった。先程まで黒霧がいた場所には大きめのナイフを逆手にもち、右足を振り抜いた出久の姿。静まった空気の中、ふうつとひとつ息を吐くと出久はいきなりブツブツと話し始めた。

「しまった。今のは下に落とすように蹴り飛ばすべきじゃなかった。でも手応えあつたし、たぶん半日は動けないかな。センサーが止められて良かつた。もし動いてたら侵

入するのに時間がかかったし、あのモヤ男への対処が遅れた。そしたらたぶん別の誰かが襲いかかっていただろうけどたぶん実体があるのは一部分だけだろうから危なかったし……」

(いきなり乱入したと思ったらなんかブツブツ言い始めた!?)

謎の事態に生徒たちは若干思考停止し、一人の少年は聞きなれたブツブツとした独り言にキレた。

「ブツブツ鬱陶しいんだよデクウ!」

「わっ……ごめんかつちゃん!……えっ?」

幼馴染みの爆豪勝己の怒声にもはや条件反射で謝った出久はギギギ、と錆び付いた口ポツトめいた様子で生徒たちの方を見て爆豪を見つけると、明らかに慌てた様子で口を開く。

「あつ、ひ、久しぶりかつちゃん。また一段とヴィランっぽくなったね」

「うっせえよ誰がヴィランだ!!」

(爆豪にビビってるわりに辛辣!?)

誰しもが思いながら、しかしあえて誰も口にしなかったことをあつさりど、なぜかビビりながら言い放った不審者に心の中で突っ込みをいれる一同。

「な、なあ爆豪、あいつお前の友達とか?」

「んなわけあるか! 誰があんなクソナードと」

切島の質問にまたもやキレる爆豪。予想通りすぎる幼馴染みに苦笑いしながらも、周囲に対して警戒を解かずに出久は答える。

「あはは…。僕とかっちゃんは幼馴染みなんだ」

「へえ…爆豪の幼馴染みか。なんか大変だな」

「アア!? どういうことだコラ!」

(かっちゃんがいじられてる!?! さすが雄英…)

爆豪と対等に話す雄英生に出久が戦慄していると、13号が生徒を守るように立ち、

出久に話しかける。

「待ちなさい。緑髪に蒼く輝く瞳、そして顔にある火傷の痕。君は『死神』ですね？」
「死神!?!自警団の類いではもつともヒーローらしいヴィランと呼ばれるヴィランではないか。まさか俺たちと同年代だったとは。だが、なぜここに？」
「あいつらを潰しに来たんだ。」

出久は飯田の質問に対して短く答えると、先ほどの様子が嘘であるかのような鋭い目で戦っている相澤の方を見た。状況確認を終えると、真剣な顔で13号たちに話しかける。

「僕はこのままイレイザーヘッドに加勢するので皆さんは雄英に戻ってください」
「あ？何言ってるやがる。デクの分際で」

要するに逃げろと言っている出久の言葉に生徒たちは顔をしかめる。あくまでヴィランの部類に入る出久を信じていいのか、そしてヒーローを目指す自分達がヴィランを前に逃げるなんてことをしているのか。そんな気持ちに囚われてしまっていたのだ。

「貴方が絶対に相澤先生を襲わないという確証がありませんわ」
「お前一人が加勢してどうにかなるのか？ それにお前も犯罪者だ。見逃すわけねえだろ」

八百万と轟の言葉に出久は心中で舌を打つ。中央広場では相澤が死柄木の個性によつて肘を負傷していた。あの様子ではもはや満足に戦えまいと考え、出久は焦る。このままでは生徒達が加勢しに行きかねない。13号も生徒さえいなければ行っているだろう。取り巻きの連中は生徒たちでも倒せるだろうが、数人強いヴィランが混じっているため殺されてしまいかねない。出久は強行手段に出ることにした。

（ならもう、早くあいつらを消してしまおう）

敵連合が消えれば雄英の生徒たちも自分にしか攻撃しに来ないだろう。それに13号が止めるだろうし、たぶんどうにかなるだろうと若干なげやりに考え、出久は生徒たちを背に向けた。

「僕はヴィラン以外とは戦わないよ。ただ人を助けたいだけだ。それに見逃す見逃さな
いとかの話じゃない。そもそも前提が間違ってる。これでも死線は何度も越えてきた
んだ。君らには捕まえられないよ」

出久は己の中で戦闘のスイッチをいれる。中央広場では相澤が黒い筋骨隆々の男、改
人脳無に殴られていた。もう時間がない。

「かつちゃん。もしここに残るつもりなら見てて。もう僕は昔の僕じゃない」

出久は返事を待たずに駆け出すと広場まで飛び降り、ヴィランたちに大声で声をかけ
る。

「一応言っておくけど、おとなしく投降する意思はある？」

「あ？何だこいつ。お前ら、やれ」

死柄木の指示と共に脳無は戦闘不能になった相澤を放り出し、残りの取り巻きと共に
出久に襲いかかった。

「そうか、人生をやり直すつもりはないんだね。それなら——命の保証はできないな」

出久は脳無の拳を避けながら飛びかかってきた取り巻きの一人顎を殴って昏倒させた。13号がブラックホールで相澤を引き寄せて回収していくのを横目にそのまま脳無の攻撃を紙一重で避け続け、順番に一人ずつ取り巻きを気絶させていく。ついに残っているのは脳無と死柄木の他にもう一人だけとなった。

「はっ！確かに接近戦じゃ強いようだが、これならどうだ!!」

ヴィランがかざした手から電撃が巨大な槍のような形をして飛んでくる。どうやら電気系の個性の持ち主だったらしい。出久はナイフを逆手から順手に持ちかえて、迫り来る雷の一点を突いた。すると電撃は初めから存在しなかったかのように霞と消える。

「電撃を無効化しやがった…」

「無効化した？違うよ。君の攻撃を殺したんだ」

「攻撃を殺しただと？意味わかんねえこと言ってるじゃねえよ」

「この世に存在している以上、全てのものには『死』がある。僕はそこにナイフを通した

ただだ」

自分の個性が効かないことでパニックになり電撃を連発するヴィランに多少の憐れみさえ覚えつつも、出久は攻撃を殺しながら走って接近し、蹴りの一撃で意識を刈り取った。

「さあ、これで残ったのは君とあの脳みそおっぴろげだけだよ」

「無傷で攻略、それも一人でとか。すごいねえ最近の子供は。恥ずかしくなってくるぜ敵連合。だが、こっちにはまだ切り札がある。いけ、脳無」

再び脳無が襲いかかり、激しいラツシユを繰り出す。オールマイト並みのスピードで仕掛けてくる脳無のラツシユを、出久は見切つて回避し渾身の一撃をいれる、が、脳無は無傷。体内にダメージが行っているという様子でもなさそうだった。ここで出久にできた隙を見逃すはずもなく、脳無は強力な一撃を叩き込む。出久は軽々と吹き飛ばされた。

（っ！とつさにガードしたけど、左腕が折れたか。それにさつき感覚。まるでクツ

シオンを殴っているみたいだった)

「脳無はシヨック吸収と超再生を持つてる。さっきの攻撃が効かなかったのはそのせいだな。そいつはオールマイトの100%にも耐えられるよう改造された超高性能サンドバッグ人間さ」

死柄木の言葉を聞いた出久はなにも答えない。ただ無言で駆け出した。当然脳無も応戦するが出久は易々と回避し、脳無の右腕にある『死の線』をなぞる。

「改造、か。確かに君は継ぎはぎだらけだ。『線』や『点』ばっかりだよ。」

脳無の右腕がだらりと力無く下がった。ナイフを通された部分はパツクリと裂け、塞がる様子はない。

「おい脳無。何で傷が治らない。たかだか腕を切られたただけだろ！超再生はどうした!!」

「治らなくて当然だよ。腕を切られたんじゃない。腕を殺されたんだ。その腕は今死んだ。死んだものが再生するはずないだろう？」

右腕が使えなくなっても脳無はまだ出久に攻撃を続けているが、やはり出久に当たることはない。出久は左腕、右足、左足と順々に四肢を殺していき、やがて脳無は動けなくなった。

「君はもう人には戻れない。人として完全に死んでいるからね。」
「だからさ——死が、僕の前に立つな」

出久は最後に脳無の胴体にある『死の点』を突く。脳無の生命はこれで完全に刈り取られ、その巨体は地面に崩れ落ちた。

「あとは君だけだ」

「嘘だろ。まさか脳無がやられるなんて。おい、黒霧！ゲームオーバーだ！撤退するぞ。起きろー！」

「無駄だよ。そのモヤ男はしばらく起きられない」

情緒不安定なのか、さつきまで余裕たっぷりだった死柄木は首元を激しくかきむしり

ながら騒ぎ始めた。そして出久が死柄木を仕留めようとしたその時、死柄木の背後に黒い穴が二つ現れて死柄木と黒霧を吸い込んで消えていき、さらに中央広場にオールマイトや13号、生徒たちがやって来た。

「やあ、緑谷少年！私が来た!!」

「相変わらずだね。オールマイト」

「ああ、変わらないとも。私はまだ現役さ！」

犯罪者とヒーローの立場でありながら、二人の距離間は友達のそれだった。奇妙な光景だな、と出久は薄く微笑む。

「緑谷少年……。なぜこんなことをしている。自分が無力であっても他人のために命を懸けられた、誰よりもヒーローたりえた君がなぜこんなことを……」

「人を助けるためだよ。こんな個性だつて人助けに役立つはずだつて思つて、僕は使い方を考えたんだ。なんてことはなかった。殺すことに特化した個性なら、更正の余地のないヴィランを殺すことに使えばいいだけだったんだ」

「っ！私の、せいなのか……。私が……あんなことを言ったから……」

「オールマイトは悪くないよ。こんな個性をもった僕が悪いんだ。どうせこれのせいで僕はヒーローには成れない。でもこの方法なら、多くの人を助けられ：グツ！」

話の途中で唐突に出久が頭を押さえて踞る。その姿に皆が困惑するが、オールマイトだけは察しがついた。

「緑谷少年。やはりこんなことはもう止めて、罪を償うんだ。私も君のお母さんも心配しているし、なによりもうこれ以上は君の寿命が「それでも!!」

「それでも。僕にはまだやることがある。だから、ごめんなさいオールマイト」

謝罪と共に出久は逆手にもったナイフを地面に降り下ろした。

ナイフが地面に突き立った瞬間、地面がひび割れ砕け始めた。生徒たちは大慌てで避難し、オールマイトもその手助けを余儀なくされる。

そして地割れが止んで土煙が収まったとき、そこにもう出久の姿はなかった。

緑谷出久は理解した 3

—雄英高校 廊下—

「……………」

食いしばった歯をギリリと鳴らしながら、爆豪は廊下を歩いていった。元々短気な爆豪だが、ここまで苛ついたことはこれまでの彼の人生でもあまりない。そんな彼の背後では触らぬ神に祟り無しとばかりにクラスメイト達がひっそりと続いていた。

(気に入らねえ…)

ほんの少し前にUSJで起こった出来事とそこで再開した幼馴染みを思い出す爆豪の内心は、ただただ気に入らないの一言のみだった。

とにかく全てが気に入らない。ヴィランに好き勝手されたのに自分は何にもできなかったこと、突然消えた幼馴染みがなんか少し偉そうになって出てきたこと、そしてなにより…変わった幼馴染みの姿を見て、ほんの少しでも勝てないと思ってしまった自分が気に入らなかった。

『変わった自分の姿をよく見ていろ』と言ってヴィラン達のもとに駆け出していった時

の出久の姿は、爆豪の脳裏に強く焼き付いている。

蒼のなかに赤が混じって輝いていた鮮やかな瞳も印象的ではあったが、爆豪が何よりも驚いたのは出久の体捌きだった。爆豪が知っているかつての出久は体を鍛えてはいたものの、動きは一般人のそれではないという程度のものである。だが先の出久の動きは全く違う、合理的で洗練されたものだった。激しく動いても決してブレずに安定している体の軸。重心の移動は滑らかで、突きや蹴りの一つ一つにはしっかりと体全体が使われており、力を余すところなく相手に伝えていた。

（あれは一朝一夕で身に付くもんじゃねえ。それを失踪してからの10ヶ月程度で身に付けてきやがった……。よりにもよってあいつが……。あのデクが……）

『これでも死線は何度も越えてきたんだ。君らには捕まえられないよ』

『もう僕は昔の僕じゃない』

「っ!!」

リフレインする出久の言葉。ずっと見下して笑い続けてきた『道端の石ころ』からの言葉は、他の誰の言葉よりも強く爆豪の『真ん中』に残っていた。

「お、おい爆豪、少し落ち着けよ。なにもできなかったのが悔しいのはわかるけどよ…」
「そうだけ。一応無事に帰ってこれたんだしs「うるせえよ！おれはすこぶる冷静だ!!」
(絶対嘘だ……)

今にも噛み砕きそうなほどに歯軋りする姿を見かねて、恐る恐る話しかけた切島と上鳴に對する爆豪の返答に一同の心がひとつになった。

「おい、爆豪」

「あ？なんだよ」

唐突に、今まで黙っていた轟が爆豪に近よって話しかけた。もしかしてクールかつスタイリツシュに爆豪を宥めてくれるのかと周囲が期待したのもつかの間…。

「あの緑谷つて奴と幼馴染みなんだろ？昔はどんな奴だった？寿命がどうつてなんのこ
とだ？」

「あ、あ、？」

この状況で最大の燃料を投げ込んだ。

「ととととつどろきオメエこの状況で何てこと言いやがるんだよ!」

「なんか悪いこといったか…?」

「天然か!?天然なのか!?!」

「空気読めなさすぎて、むしろ少し面白いかも」

峰田の突っ込みの意味が心底分らないという顔の轟に一同が苦笑いになり、張り詰めていた空気が弛緩するなか、爆豪は轟の言葉が気になっていた。

（寿命、そうだ寿命だ。オールマイトが言っていた。なんのことだ?あんときの傷は火傷だけ。死にかけたにしてもこの先の寿命には関係ねえはずだ）

ヘドロヴィランの事件を思い出すが、出久の寿命に関わることについて爆豪に心当たりはない。

（考えてもわかんねえなら…聞きにいくか）

(爆豪、あいつどこに…?)

難しい顔をしながら一人先を歩き、教室とは別の方向に行く爆豪。その姿を轟だけはしっかりと見ていた。

無事にUSJから帰還したオールマイトは、今回の件について話し合うため、刑事の塚内と共に応接室に向かっていた。マッスルフォームの活動時間も限界に差し掛かってきているため自然と早足になる。

「大丈夫かい？オールマイト。少し焦っているように見えるが」

「ああ、大丈夫だよ塚内くん。ただ活動限界が近いからね」

大丈夫というわりにはオールマイトの笑みにいつもの力強さが無い。刻一刻と迫る

限界時間だけでなく出久との再会、そして何より出久から告げられた言葉が、オールマイトから活力を奪っていた。それほどまでに出久の変貌はオールマイトにとって衝撃的だったのだ。

そのまま無言になってしまった二人が歩いていると、背後から少なくとも聞いた人間の十人中八人は感じ取れるほどの苛立ちを込めた足音が聞こえてきた。

「オールマイト!!」

「ば、爆豪少年!? それに轟少年も!」

「あ? おい…なんでテメエがついてきてやがんだ半分野郎!!」

「オールマイト。あの緑谷って奴とはどういう関係なんですか。あいつのあの強さはいったい…」

「無視してんじゃねえ!!」

「こ、こら君たち」

気づかない内についてきた轟にキレル爆豪と、それを素でスルーする我関せずな轟。唐突に現れた二人の存在やその発言に困惑しながらも、活動限界時間が迫り焦るオールマイト。さらにはとりあえずこの場をどうにかしようと思えば爆豪たちを注意しようとする

塚内というように混沌とした現場で、ついにオールマイトの限界が訪れた。

「ま、不味い。もう限界が…」

「っっ!？」

突如身体中から煙を発しながら萎んでいくオールマイトを前に、信じられないものを見る目で驚く爆豪と轟。

(あのとときと少し似ているな)

力が抜けていく感触と共に、正義の象徴はかつてちっぽけで気弱な少年に秘密がばれてしまったときのことを思いだし、懐かしさを感じながら苦笑した。

「オールマイト…なのか？」

信じられないというような轟の声。爆豪は言葉をなくしている。

「ああ、そうだとも。この貧弱な姿が、今の私さ」

—雄英高校 応接室—

とりあえず応接室まで移動した三人は校長の根津を含めて話をすることになり、まずはオールマイトの事情をかいつまんで話した。塚内は別室で待機している。

「オールマイトがそんなことになってたとはな…」

「んなことは今はどうでもいい。俺らが言わなきやいいだけの話だ。それよりデクのことだ！」

「緑谷少年については轟少年にも分かりやすいように説明しよう。10ヶ月ほど前とあるヴィランが大暴れしたのを覚えているかな？」

「ヘドロの個性をもったヴィランですよね。被害者の片方は確か…」

隣の爆豪を見る轟。爆豪は苦虫を千匹ほど嘔み潰した顔で舌打ちした。

「ああ、爆豪少年だ。そして被害者のもう一人、爆豪少年を助けるために我が身を省みず飛び出したのが緑谷出久少年だ」

「でもその行動は、ヒーロー側としては決して褒められたものじゃあないね」

「ええ、仰る通りです校長先生。彼もそれをよく理解していたようですね。病室を訪れたときの彼の顔はとも見ていられませんでしたよ。目の前に私がいるはずなのに、彼の瞳はなにも写していなかった」

オールマイトの悲壮な表情に皆何も言えないでいる。特に爆豪の衝撃は大きい。彼にはそんな姿の出久がまるで想像できなかった。なぜなら爆豪が知っている出久はどんなことがあっても諦めない人間だったからだ。

個性がなくても、いじめられても、どこか俯瞰した目で背中を追いかけてくるような奴。自分に対して腰の低い対応をしていながらも決して媚びることはなく、むしろ歯向かうことすらあった異質な存在。何を考えているのか全くわからない部分は正直気持ち悪くてたまらなかったが、そこだけは認めていた。

だからこそ納得できない。自分のやったことが誰かを助けるどころかむしろ迷惑に

なった程度や、無力さを思い知らされた程度では、落ち込みはすれど絶望して立ち止まることがないはずだ。少なくとも人を容赦なく殺したり、母親を泣かせるようなことはしないし、そんなことをする度胸はない。爆豪のなかでは、出久は『そういう奴』だった。

「それだけじゃねえだろ。それだけであのデクに人殺しができるだけの度胸がつくとは思えねえ」

「さすが幼馴染みだね。爆豪少年の言うとおり、緑谷少年を苦しめていたのはその事だけじゃない。続きを話そうか。次は彼の個性についてだ」

「それだ。デクの野郎は無個性だった。だがさっきあいつがやったことは個性なしじゃ説明がつかねえ。あいつ…!!」

再びギリリと歯軋りし始める爆豪。言外に自分を騙していたのかと言っている爆豪を見て、慌てながらも決まりの悪い様子でオールマイトが否定した。

「爆豪少年。別に緑谷少年は君を騙していた訳じゃないんだ。彼の個性は彼自身の、その…臨死体験によって発現したんだよ」

「臨死体験ってことは…」

へドロヴィランの事件で出久が重傷を負った原因を思い出した轟は、爆豪の様子をうかがう。爆豪の表情が固くなった。

「…彼の個性は死を視ることができる個性だ」

「死を…視る……？」

まるで意味がわからないといった様子の轟にオールマイトは無理もないと苦笑する。

「分からなくて当然だ。何せ、直接説明された私も未だに理解できていないからね。ただ彼が言うには、この世に存在するありとあらゆるものの『終わり』というか、『寿命』のようなものを認識できるらしい」

「なんか理解できそうで、いまいちピンと来ない話ですね」

『見る』類いの個性は大体皆そうだよ。視覚にしろ聴覚にしろ、どれだけ説明されたって、実際に彼らの感じている世界は彼ら以外にはわからない。理解はできても共感はできないんだ。そしてさらに言えば、そういう類いの個性持ちは得てして見えてしまうが

故の苦しみを抱えているものさ。その子もそうだったんだらう？」

「緑谷少年の個性はオンオフができない。死という概念を24時間常に感じ、意識し続けるんだ。彼の感じているストレスは計り知れない。実際に彼は個性が発現した数日後に発狂し、自らの両目を潰している。もつとも、翌日には再生したらしいがね」

「目を…!？」

「っ……………!」

両目を潰したという事実のインパクトがよほど大きかったらしく、翌日に再生したという異常が頭に入ってこないほどに驚く轟。爆豪に至っては頭の中が真っ白になってしまったのか、最早声すらあげられずに血の気の引いた顔で口を開けたまま硬直していた。

そんな爆豪の姿を痛ましげに見るオールマイトは、もう話を切り上げてしまおうかと考える。このまま話を続けるのなら、彼はさらに残酷な事実を爆豪に突きつけなければならぬ。そうなってしまうえば爆豪はこれから永遠に罪の意識を感じながら生きていくだろう。

出久の味わった苦しみも、出久がとつた行動も、その原因はヘドロヴィランでありオールマイトだ。少なくともオールマイトはそう考えている。だが同時に、爆豪本人は

そうは思わないであろうとも考えていた。

爆豪は他人に対していろんな意味で厳しく容赦がないが、己にもまた高いハードルを課す性格である。他人が何を言おうと――例え出久本人に悪くないと言われたとしても――納得しないだろう。罪を抱えて生きていく教え子の姿など見たくはない。故にオールマイトは席をたとうとした。

「緑谷少年についてはこんなところだ。僕は塚内くんを呼んでこよう。さあ、君たちももう教室に戻りなさい。相澤くんに連絡したとはいえさすがに「……待てよオールマイト。話は終わってねえ。デクの奴にはまだ何かあるんだろ？」

言葉を遮って、しかしいつものように声を荒らげることなく話の続きを求める爆豪の顔は決意に満ちている。その顔を見たオールマイトははぐらかすための言葉をつい飲み込んでしまった。もう爆豪自身が薄々気づいてしまっていると悟ったからだ。轟も真剣な表情でオールマイトを見つめている。ここで引く気などないという気持ちが表れていた。

「……緑谷少年の個性はとても強力なものだ」

長い沈黙の後に、オールマイトは観念したかのように話始めた。その表情は重い。

「彼の目は死を捉え、彼の脳は死を理解する。『見えるのなら触れる。理解できるのなら干渉できてしまう』緑谷少年が私に言った言葉だ。彼はその言葉の通りに死に触れ、いつか来るそれを強制的に現在に発現させてしまえる。言ってしまうえば、彼は指で触れるだけでも殺せてしまうんだよ」

「じゃあ死神…緑谷がナイフ一刺しで地面を割ったのは」

「地面を『殺した』んだろうね。まさに崩壊とっていい割れ方だった。ただの地割れだけだとまずああはならない」

「だけどそれほどの個性なら何かしらデメリットがあるんだろう？死なんてものを感じとるんだ。脳への負担は尋常じゃないはずさ」

根津の言葉を聞いたオールマイトの雰囲気がいよいよいつそう重くなる。その顔に滲むのは悲哀、悔恨、そして罪悪感。

「…流石にご慧眼ですね。校長先生。仰る通りです。結論から言ってしまうえば、緑谷少

年の余命は長くて3年ほどらしい。20まで生きられる可能性はほぼないそうだ」

オールマイトの言葉の後に沈黙が訪れる。根津も轟も爆豪も声も出ないといった様子だ。三人の返答を待たずして、オールマイトは話を続ける。

「ここから先は私の罪の告白になるが……。あの事件のしばらく後、メディアへの対応などを済ませた後に、私は緑谷少年の病室を訪れた。彼は悩んでいたよ。彼の夢はヒーローだった。だが彼は誰にでもあるはずの力を手に入れたと同時に、誰にでもあるはずの時間を取り上げられた！」

オールマイトが感じているのはやるせない現実に対する行き場のない怒り。それはこの場にいる全員が気づいていた。子供の前ですらそれを隠し通せないほどに、平和の象徴の心は傷ついていた。

「助けたいと、助けなければと思ったんだ。だから彼が元々持っていた『人を助けたい』という気持ちを思い出させた。彼は少しでも元気になってくれたよ。そこで私は安心してしまった。少しは償えたよ」

オールマイトの拳が固く握りしめられる。

「そしてそれどころか…ッ！私は…『これで少しは許されてもよいのではないか』などと！」

「そんなことを無意識にでも考えていたからだろうな。『その個性も人助けに使えるはずだ』などと言ってしまった。緑谷少年がどれ程ヒーローに執着していたかを…どれ程自己を省みないかを知っておきながら…私は……ッ！」

荒くなった息を落ち着けようとしながらも、未だにオールマイトの拳は握りしめられており、血が流れてすらいる。

「…すまない、取り乱してしまった。ともかく、私が緑谷少年について語れるのはここまでだ。二人とも、今度こそ教室に戻るといい」

オールマイトは立ち上がる。まだ完全に落ち着いてはいない。ともかく今は少しでもクールダウンする時間が欲しかった。オールマイトが部屋を後にしようとドアを開

けたそのとき。

「オールマイト」

「爆豪……？」

「爆豪少年？」

立ち去ろうとするオールマイトを爆豪が呼び止めた。

「俺だ」

「……？」

「デクの奴を終わらせちゃったのは、俺だ」

「っ！爆豪少年……君はやはり……」

く。一言いい終わると同時に、爆豪は返事も聞かずにオールマイトの隣を通りすぎていく。

（そうだ、俺だ。俺がアイツのすべてを奪終わらせった。だからまた俺が……アイツのことを

止終わらせるめる
()

10ヶ月前の間に合わなかったあの数秒が、二人目の少年の進む道を大きく変えた瞬間だった。

緑谷出久は呼び出した 緑谷出久は呼び出した

不思議な夢を見た。

真つ暗闇のなかに立っていて、辺りには誰もいない。

ただ目の前にはドアがあったから、不安になった僕はとりあえずドアを開けてなかに入ったんだ。

そこは青い部屋だった。落ち着いた雰囲気の広い空間の中央にぽつりとテーブルと椅子があつて、やたらと鼻が長い老人が座っている。その横にはソファに座っている学

生服を着た容姿端麗な高校生くらいの少女。XXIIに見えるようにつけたヘアピンと、腕に巻いた腕章が特徴的だ。

「ほう、これはまた変わった場所からお越しの方だ。まさか繋がるはずのない世界からいらつしやるとは」

驚いた顔で僕の方を見ながら老人が話しかける。言葉の意味がわからない僕はただ困惑するだけだ。すると老人の言葉に少女が反応した。

「これ、もしかしなくても私のせいだよね」

「いえ、貴女のせいではございません。貴女を助けようと異世界にまで手がかりを求めながら後始末をおざなりにしたエリザベスのせいでございます」

「うん、やっぱり私のせいだね」

少女の言葉に老人が黙り込んでしまう。この状況はなんだろう。この青い部屋も彼らの言葉もよくわからない。しかもなんだか僕の存在は忘れられてしまっているし。とりあえず彼らに話しかけてみよう。

「あ、あの…」

「おお、これは失礼いたしました。私の名はイゴール。ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場。「私は汐見琴音。昔ここに招かれた人間だよ。まあ、君の先輩になるかもしれない人かな。今は訳あってここでお世話になつてるの。君は？」

(すごく食い気味な自己紹介だ!?)

老人の言葉を遮ってこちらに近づき自己紹介をし始める少女に、つい内心で突っ込みを入れてしまった。老人は笑顔のままだが心なしか不満げに見える。そして少女は距離が近い。

「緑谷出久、です」

(お、女の人としゃべっちゃつてる!!)

「よろしくね! 出久くん」

「は、はい!」

(なんか輝いて見える! 笑顔ヤベエ!!)

汐見さんのまわりが輝いて見える。正直このレベルの美少女は見たことがない。汐見さんの笑顔にどきまぎしていると、イゴールさんが唐突に話を始めた。

「本来ここは何らかの形で『契約』をなされたお客人のみがおとずれることのできる部屋。であれば、ここにいらつしやつた貴方にも『契約』をしていただきましょう」
「契約って…。僕は何かしなくちゃいけないんですか？」

お金払えとかだったらどうしよう。今月はオールマイトのグッズの新作が発売されるし結構厳しいから無理なだけだ。

「ご心配めさるな。なに、そう難しいことではございません。貴方は内容を確認した上でこれにサインするだけでよろしい」

イゴールさんはテーブルに紙とペンを置いた。紙にはこう書かれている。

『我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん』

「貴方が支払うべき対価はただ一つ。ご自身の選択に相応の責任を持ち、その先の結末を受け入れて頂くことです」

正直、この契約を結ぶ必要はない。はつきりいって色々怪しいし。でも、ここで契約すれば何かが変わるような気がした。ヒーローを目指しながらもなにも出来ずに過ごしている日々が、確かに変わる気がしたんだ。だから僕は少し震える手でその契約書にサインした。

「では、これで貴方は我が『ベルベットルーム』のお客人だ。これをお持ちなさい」

イゴールさんから渡されたのは青い鍵。汐見さんが言うにはベルベットルームの使用者である証であり、契約者の鍵というらしい。

「それにしても貴方は変わった運命をお持ちのようだ」

「変わった運命？」

なんのことなんだろう。まるで占い師みたいな言葉に余計に混乱してしまう。

「左様。貴方はご自身の持つ力に気づいておられますか？」

「いや、力もなにも僕は無個性で……」

そう、僕は無個性だ。他のみんなが何かしらの能力をもつて生まれるなかで、僕は何の能力も持たずに生まれてきた。だからイゴールさんの言う力に心当たりなんてない。

「お気づきでないのならば今はまだそれでよろしい。貴方と我々は本来出会うはずのない者どうしであり、貴方の持つ力もまた、目覚めるはずがなかった力。しかしこうして我々が出会ったことで、貴方はこの先定められていたものとは異なる未来に行くことになるでしょう」

結局言っていることがよくわからない。僕になにかしらの力があるって言いたいんだらうか。すごく思わせ振りを言っているけどいまいち伝わってこないし、どうすればいいんだらう。

そしてさっきからずっとあの長い鼻が気になって仕方ない。あれはイゴールさんの個性だったりするんだらうか。鼻が伸縮自在とか。

そんな僕の気持ち伝わったのか、汐見さんが笑い声を抑えようとしながらソファの上で悶えている。でもぶつちやけ抑えきれないんだけど…。

「プ…ククツ…出久くん、ずっと鼻見てっ…ヤバツ…あの歌…思い出し…長い鼻っ…クククツ」

すごく楽しそうだ。あと歌ってなんだろうすごく気になる。そしてイゴールさんに目を向けると……。

（笑顔だけど目が笑ってない!?怒ってる！絶対怒ってるよ!!）

「ご、ごめんなさいイゴールさん。その、えつと…」

「いえいえ、お気になさらず。詳しくは後々、いずれまたお越しになられたときにご説明致します。それではまた会うときまで、ごきげんよう」

「えっ、ちよつまっ…」

そんな一方的な言葉で急に話を完結させてくるイゴールさん。

(やっぱ怒ってますよね!?)

そんなこんなで僕は追い出されるように夢から覚めた。

学校が終わった帰り道。片手に少し焦げたノートを持ちながら、僕は道端の石ころを蹴る。今日はさんざんだった。妙な夢を見るし、先生は志望校のことばらしちゃうし、かつちゃんも僕のノート投げ捨てるし。

そういえばあの夢はなんだったんだろう。起きたときには契約者の鍵もちちゃんもあつたから、少なくともただの夢で済む話ではない。イゴールさんの言っていた目覚めるはずのなかった力っていうのも気になる。

「つて、考えたところで分かるわけないか」

とりあえず今は目先のことを考えよう。僕は無個性だけど、何とかして雄英に受からなきゃ。ヒーローになるためにこんなところで躓く訳にはいかない。そう思ったときだった。

「………？」

背後から変な気配がするような気がして振り向くと、そこにはヘドロのような何かがある。よく見てみれば目みたいな部分があるし、それ以前に自立移動してる。ということ。は生物、恐らくは個性を使っている誰かなんだろうけど、ここで個性を使う必要なんてないし、明らかに悪そうな表情で徐々にこっちに近づいてきてるから…。

「ヴィラン!？」

叫んだ瞬間、ヴィランはこっちに飛びかかってきた。反射的に後ろに飛んで回避し、そのまま全力で逃げる。

(大通りまで逃げよう!そこまで行けばきつと誰かがヒーローを呼んでくれる!!)

しかし相手は思ったより素早かった。

「大丈夫。ちよつと君の体に乗つとるだけさ。逃げないでよ」

（えつ、ちよつはやつ!?）

ヴィランは僕に巻き付くと、締め上げながら僕の体に乗つ取ろうとしてくる。呼吸が出来ずに息が苦しくなり、徐々に体の自由がきかなくなってきた。自分の体が異物に侵食されていく気持ち悪い感覚が苦しさと共にやって来る。

（死ぬ…死ぬのか？僕、こんなところで死…ぬ……？）

ドクン、と鼓動が聞こえる。僕の心臓の鼓動。自分の中から何か弾け出しそうな感覚と共に鼓動は徐々に速まっていく。そして僕は極限状態のなか、叫べと言わんばかりに頭のなかに強烈に浮かび上がる言葉を口にした。

「へ」

自らを蝕もうとする『死』を強く意識する。

「ル」

苦しさも不快感も、今このときはすべて忘れて。

「ソ」

自分の内より出ようとする何かの声にただ耳を傾け。

「ナ」

心の中の引き金を、引いた。

パリン、とガラスが割れるような音と共に僕の足元から蒼い光が湧き出し、光の粒子が舞い踊る。ヴィランは僕の体から弾かれるようにして吹き飛んだ。

それと同時に感じる、自分の内側から何か外に出て行く感覚。後ろを振り向くと、僕の背後には太刀と長弓を持ち、古代日本の白い服を着た黒髪的美丈夫が浮かんでいた。

《我は汝…汝は我…我は汝の心の海より出し者……拓き治めるもの『オオクニヌシ』なり！》

オオクニヌシの力強い声に背中を押されるようにヴィランを見る。なんだか体が熱い。力がみなぎってくる上に妙に冷静だ。さっきまで息苦しかったこともあり、僕はヴィランのボタンを上から順に外していく。ふう、これで楽になった。

「な、なんだよ。それ。お前の個性か？は、ははっ！こりやいや。お前を乗つとればヤツに報復できる!!」

気圧されながらも強気な言葉を吐くヴィランを見ていると自分の中に自信が生まれた。いける。今の僕ならきつとあいつを倒せる！

「その体、よこせエー！」

叫びながら襲いかかってくるヴィランを避けつつオオクニヌシに攻撃させる。頭のなかに『スラツシユ』という言葉が浮かんだ。するとオオクニヌシは太刀を抜き放ちヴィランを切り伏せる、が、しかし切られたヴィランは何事もなかったかのようにくつき、再び僕を襲ってきた。

「やっぱりあの体じゃ斬撃は効かない……。それなら！」

僕の頭に『ジオ』という言葉が思い浮かぶ。どうやら雷を出す魔法らしい。魔法なんでものが使えるのかと驚きながらも僕はジオを放つ。

「グッ、ガアアア！」

「通った！」

不純物だらけだったのか、液体の体であるヴィランに電撃はよく通った。それでもまだ動けるようで、じりじりとこちらに迫ってきている。あれに触れられるのは良くない

い。恐らく触れられた所から絡み付いて乗っ取りにくるだろう。だからまずは……。

「動きを止める。オオクニヌシ！」

僕の声と共にオオクニヌシが長弓を構え、光の矢を二回連続で放つ。二連牙という技だ。放たれた矢はヴィランを貫通して消えていき、ヴィランはダメージこそないが、二連牙の衝撃で体が飛び散ったために動けなくなった。ヴィランが元に戻ろうと一塊になったところを見計らって僕はジオを放つ。耐え切れなかったらしいヴィランは気絶して動かなくなった。

「終わった、のか……？」

相手を倒したことを実感した瞬間にどっと疲れが押し寄せてきた。肉体的なものじゃなくて精神的なものだ。意識も朦朧としてきたし、オオクニヌシも蒼い光を放ちながら徐々に消えていつている。

（だめだ、もう、限……界……）

オオクニヲシが消えると同時に僕は意識を手放した。

「大丈夫か少年！しっかりするんだ!!」

気絶する寸前、聞き覚えのある誰かの声が聞こえたような気がした。

気がついたときに視界に入ってきたのは青色。状況が飲み込めない僕は辺りを見回す。

「(？)(？)は…」

見覚えのある青い部屋。椅子に座りテーブルに両肘をつく長鼻の老人と、高級品であ

ろう上質なソファに腰かける美少女。どうやら僕はまたベルベットルームにやって来たらしい。

「ようこそ。我がベルベットルームへ」

「やつほー！出久くん」

（挨拶の落差が激しい!?）

二人にどうもと返しながら、記憶を振り返る。たしか僕はヴィランに襲われて、撃退した後に意識を失ったはずだ。なんで僕はベルベットルームにいるんだろう。僕の体はどうなってるのかな。考え込んでいると、イゴールさんが話しかけてきた。

「ご心配めさるな。現実の貴方は眠りについていらつしやる…。私が夢の中にて、お呼び立てしたのでございます。再びお目にかかりましたな」

どうやら現実での僕は気絶したままらしい。イゴールさんはお呼び立てしたと言っていた。呼ばれた理由は恐らく、さっきの戦いで目覚めた方のことだろう。たぶん知っているだろうし聞いてみようか。

「あの力ってなんだったんですか」

「あれはね、出久くん。『ペルソナ』っていうの」

「ペルソナ…?」

ペルソナ…。聞いたことのない言葉だ。

「貴方が手に入れられた『ペルソナ』…。それは、貴方が貴方の外側の事物と向き合った時、表に現れ出る『人格』。様々な困難に立ち向かうための人格の鎧」

つまりペルソナは僕自身ということだろうか。

「じゃあ、このペルソナがイゴールさんの言っていた僕の持つ力、僕の個性なんですか。」
「そうとも言えますがそうでないとも言える。貴方の持つ真に他者とは異なる力、それは『ワイルド』と呼ばれる力。空っぽにすぎないが、無限の可能性も宿る。いわば数字のゼロのようなもの」

「ワイルド…。この力があれば、僕もヒーローに……」

ヒーローになれるかもしれない。でもいまいち自信がでなかった。今までずっとなれないと言われ続けたからかもしれない。悩んでいるのが表情に出ていたのか、汐見さんが僕の手を握って語りかけてきた。

「実はね、私もワイルドなんだよ」

「汐見さんも!？」

「琴音でいいよ」

まさか汐見さんもワイルドだったなんて思わなかった。

「私の友達が言ってたんだけど、ワイルドの力は『何にでもなれるけど、何にも属さない力』なんだって」

「なんにでも…?」

「うん、だから出久くんは何にだってなれるよ!もちろん、ヒーローにだってなれる!!」
「そっか…僕は…ヒーローになれるんだっ…:…!」

ようやく誰かに認めてもらえた。そんな気持ちで胸がいっぱいになって、自分でも気づかないうちに涙が流れていた。やっぱりあのとき契約書にサインしておいてよかったと思う。僕の本来の運命がどんなものだったかは知らないけど、それでもこの道が今の僕の歩むべき旅路なんだ。

ただ、泣いてしまったことで汐……、琴音さんによしよしと慰められてしまったのは恥ずかしい秘密だ。

こうして交わることのない二つの世界の住人たちが交わり、出久の旅路は変化する。

「そいつのような偽物はヒーローを歪ませるガンでしかない。誰かが正さねばならないんだ。だから殺す」

「もつと血出てたほうがもつとカツコイイよ出久くん！」

「やっぱり鬱陶しいんだよお前！オールマイトみたいな目をしやがって……。救われなかった人間などいないかのようにすごしやがって!!」

「ペルソナアアア!!」

「ペルソナ能力は心を御する力。他者と関わり、絆を育むことで、貴方だけの『コミュニケーション』を築かれるが宜しい。」

「か、かつちゃん」

「あ?なんだよデク」

「その…。一緒に帰らない?」

「なんでてめえなんかと一緒に帰んなきゃならねえんだよクソナード!!」

(どうやって絆を育めっていうのさ!?)

「む、あそこにいるのは他校の女子か?見たことのない制服だが…」

「あつ!おーい、出久くーん!!」

「琴音さん!?!」

「緑谷ア!あんな超絶美人の姉ちゃんと知り合いなんてオイラ聞いてねえぞ!!」

一 発ネタ

緑谷出久は才能がある

とある中学校。

地域のなかで一番の進学校というわけでもなく、何かしらのスポーツの強豪校というわけでもない。平凡で普通な学校のとある教室で、授業中であるにもかかわらずカタカタというキーボードの音が鳴り響く。

「いっいっいっ…。もう少しだ。もう少しで完成する…！」

机に堂々と教科書ではなくノートパソコンを広げている生徒。緑谷出久は怪しげな笑みを浮かべてブツブツと独り言を呟きながらもその両手を止めず、忙しなく動かし続けている。

当然そんな生徒を見逃す教師などいない。黒板に数式を書いていた教師はその手を止め、出久の元へ近づいて話しかけた。

「おい、緑谷。もう授業時間半分過ぎたぞ。休み時間はとづくにすぎてるんだ。そろそろちゃんと授業を受けないか。いくら毎回全国模試一位とはいえっても、受験も近いんだ
「黙れ！」

「ここは普通の学校。平凡で普通の教師達が勤務する普通の中学校だ。だがしかし、生徒達まで普通であるとは限らない。」

「そう、突き抜けたものがいた。主に二人ほど。」

「一人は性格は悪いが成績優秀で強力な個性を持ち、難関の雄英高校ヒーロー科に確実に合格するだろうと言われている少年。爆豪勝己。」

「そしてもう一人は二つの理由で有名な少年だ。一つは入学以来定期テストでも全国模試でも満点を取り続ける天才でありながら、『個性』を持たない『無個性』であること。」

「もう一つは——」

「神の才能を持つこの僕のクリエイティブな時間の邪魔をするなア!!」

「普段はおとなしく心優しい性格であるのに、開発中や勝負事になるといろんな意味で突き抜けた性格に豹変すること。」

そんな少年が、ヤベ緑谷出久ヤツが、ここにいた。

時はかなり進んで、雄英高校体育祭。

第一種目の障害物競争のスタートゲートの前では生徒たちが位置についていた。

「うわあ……。みんなすごい気迫だな」

「おや、出久さん！相変わらず弱気な顔してますね」

「そういう発目さんは……。フル装備だね」

出久に話しかけてきたのは同じサポート科の発目明だった。彼女は身体中に自身の発明したサポートアイテムを装備しており、鎧でこそ無いもののその様はまるで重装兵のようだ。

「当然です！今日は私のドツ可愛いベイビーたちのお披露目会とも言えますからね。心が踊ります!!」

「そっか。まあ僕もまだヒーローになるのを諦めた訳じゃないし、この体育祭でアレのテストもしておきたいからね」

「話に聞いていたライダーシステムですね!!」

「うん。あつ、もう始まるみたいだよ。よし！オールマイトも見てるし、僕も本気で取りに行く……!」

目が赤く光り、出久の雰囲気が変わった。そして不敵な笑みを浮かべる。

(おつ、スイッチが入りましたね)

「それでは…テストプレイを始めるとしようかア…!」

スタートの合図と同時にヒーロー科の轟焦凍が個性を発動させ、背後の生徒達の足元を凍らせる。同じクラスであるA組の生徒たちは軽々と回避したが、他の生徒はそのほとんどが動きを止められていた。

しかしA組以外であっても、轟の妨害をよんでいた生徒がいる。そう、例えば…緑谷出久とか。

「やはり轟焦凍の氷が来たか。初見殺しの技としては優秀だが、この学園にいる人間は教師も含めて全員データを収集済みだア…。僕の才能にかかれればこの程度の妨害を予測するなど容易い！」

(いや、なら先に進めよ…)

出久は轟の妨害を回避しながらも、先に進まず取り憑かれたように一人で喋っている。

周囲のちよつと引いた視線を一身に受けながらも、出久は気にせず懐からピンクとライトグリーンの色をした機械のゲームドライバーを取り出して腰に当てる。すると自動でベルトが飛び出して出久に巻き付いた。そしてそのまま紫のグリップのついた薄いカード状の機械であるガシャットを取り出して右手に持ち、親指でスイッチを押す。

「僕の発明を世間に見せつけるときが来た！この僕の神の才能の前では、個性の有無など…もはやあつてないようなものだア!!」

《MIGHTY ACTION X!!》

音声と音楽が流れ、出久の背後にゲームのスタート画面のようなウィンドウが出現し、複数のブロックがばらまかれる。周囲の引き気味だった視線が驚きと興味の視線に変わった。出久はガシヤットを半回転させてゲームドライバーに差し込む。

「変身」

《レッツゲーム！ メツチャゲーム！ ムツチャゲーム！ ワツチャゲーム？ アイム

ア 仮面ライダー!!》

「仮面ライダーゲムLv1」

音声が始り終わると出久は言葉通り変身していた。

…ちよつとずんぐりむつくりした、二頭身の風貌に。

(……ゆるキャラ?)

(ちよつとかわいい)

高度な技術力が窺い知れる変身アイテムに皆が驚き、その期待が高まっていただけ

に、周囲の生徒たち（とくに男子）も残念感漂うこれには脱力ものである。女子達のかなには和んでいるものもいたが。

だがゲムムは気にしない。フウ！という掛け声と共に右手を振り上げながらジャンプする。それと同時にゲムムの頭上にブロックが出現し、振り上げた右手に破壊された。するとそこから円形の板のようなものが出現し、ゲムムに吸い込まれていく。

『高速化！』

「ハッハア！アイテムゲットだア！！」

アイテムの名前の通り、空中に生み出したブロックの上をとてつもない速度で走り去っていくゲムム。

聞き覚えのある掛け声、ジャンプ時に振り上げられた右腕、壊れたブロックから出てくる強化アイテム。目の前で起きた光景に人々は頭を悩ませる。

具体的には、あれ？なんか見たことあるぞ？という感じに。

脳内でゲムムの白と黒のカラーリングを赤と青に、円形のアイテムをキノコ型に変えてみる。

うん。これ、あれだ。

(マ〇オだ!!)

観客も含めた全員の思考が一致した瞬間だった。

第一関門のロボ・インフェルノを7.7tのパンチ力と11.5tのキック力を見せつけながらあつという間に駆け抜けたゲナムLv1は、第二関門のザ・フオールにやって来た。

そこでは多くの生徒が立ち尽くすなか、ちょうど発目が自身のサポートアイテムを使って障害をクリアしようとしているところだった。

「さあ見ててできるだけデカイ企業ー!!私のドツ可愛いベイビーを!!」

「すごい。負けな…っ!?!何あれ!?!」

「ほう。さすがは発目さん。僕ほどではないとはいえ素晴らしい才能だ」

突然頭上に現れたブロックとそれに乗るゆるキャラに驚く麗日お茶子。

「このままLv1で行くつもりでしたが、それでは面白くないか。ならば少し本気を
出すとしよう」

ゲムムはそう言うと、おもむろにゲームドライバーのレバーを開いた。

「グレード2」

《レベルアップ！ マイティジャンプ！ マイティキック！ マイティアクションX

!!》

（やせた！そして伸びた!!）

もはや歌といってもいい音声と共にゲムムはLv1からLv2へとレベルアップした。姿も大きく変わっている。ずんぐりむっくりした感じの姿から、シュツとした感じの姿に。

「まだまだこれでは終わらないさ。次はこれだ。グレード3」

ゲムムは新たなガシャットを取りだし、スイッチを押した。観客も周囲の生徒たちも皆、ゲムムの次なる変身に期待を募らせ夢中になっている。

《JET COMBAT ! ! 》

背後にゲムムのウィンドウが表示されると、ゲムムはゲームドライバーのレバーを閉じ、手に持ったガシャットを二つ目の差し込み口に差し込んでから再びレバーを開いた。

《レベルアップ!》

《ジェット! ジェット! インザスカイ! ジェット! ジェット! ジェット
コンバット! 》

ウィンドウからロケットのような形をしたコンバットゲームマが出現し、変形しながらゲ

ンムLv2に装着された。ゲムムの胸部には戦闘機のような形のアーマーがつき、腰の両側にはガトリング砲のガトリングコンバットが装備されている。

「それじゃあ先に行かせてもらおうよ」

「ずるい！くやしー!!」

「だあははははは！神の才能にイ…不可能は無い!!」

芦戸三奈の叫びに対して、恐らく後々聞いたら黒歴史物の返答をしながら、ゲムムLv3は背中のジェットを使って空を飛び、先に進んでいった。

「む、あれは出久さんですか。あの洗練された装備と大胆な発想！さすが出久さんです!!あとでお話を聞かなければなりませんね。ですがそれはそれとして、私のベイビーたちも負けてもらえません!!」

発目は飛んでいくゲムムを見て悔しさと尊敬を同時に感じながら、自らを奮い立たせる。

そしてゲナムは第三関門である怒りのアフガンにたどり着いたのだが、正直地雷源など空を飛んでいる今の彼には関係ない。地雷に四苦八苦しなながらゆつくりめに進む地上の生徒たちを尻目に、ゲナムは一人悠々と上空を行く。そしてゴールが近くなったところで再び視線を落とすと……。

「……あれは……」

眼下には首位を争っている轟と爆豪がいた。

ゲナムは考える。彼らはお互いの対処に必死で自分の存在に気づいておらず、彼らの進行方向にはまだ大量の地雷が埋まっている。そして自分の両腰にあるのはガトリング。

「アハア……!」

仮面の下で怪しげな笑みを浮かべながらゲムはすぐにその考えを思い付く。
やることはもう、決まっていた。

猛烈な勢いで追い付いてきた爆豪との首位争いに必死になっていた轟は突然の事態に反応できなかった。しかし実際のところ、銃声がしたと思ったら前方の地雷が突如爆発したのだから、反応できなくて当然である。

土煙にまみれながらも足を止めずに走りながら、轟は状況把握に努める。爆豪は……まだ右側にいる。巻き込まれたようだ。ということは爆豪の妨害ではない。では一体誰の妨害なのか。

そんな轟の疑問の答えは二度目の銃声や爆発と共に降りてきた。文字通り降りてきたのである。ジェットで。

(なんつだありや!?)

後続に道を作るのを覚悟で地面を凍らせて進み始めた轟は土煙のなかで確かに見た。背中にジェットをつけた人影が高笑いしながらゴールへ飛んでいくのを。

『まさかまさかの大番狂わせ！序盤でいったい誰が予想できた!?!』

『ヒーロー科の連中すら押し退けて一番最初にスタジアムに還ってきたサポート科のその男!』

『緑谷出久の存在を!!』

See you Next game ?

嘘予告

次回の『緑谷出久は才能がある』は…。

「緑谷少年！久しぶりだね!!」

「無個性のまま強くならなきゃ意味がないんだ…!」

「俺は右だけで一番になる…」

明かされる過去と唐突な宣戦布告。

「何でサポート科なんかに行きやがった!!」

「か、かつちゃん…」

「やめないか爆豪くん!」

「こんのクソデク「緑谷出久だア!!」

幼馴染みの抱えてきた想い。

「虐げられている人々に安全と安心を与える……それがヒーローという職業の使命だ
!」

「全力……なんのつもりだ……！」

「どうせなったところで……クズみたいなヒーローだろうなあ!!」

そしてゲンムの力は――

「感謝するよ……轟焦凍オ！」

「俺は……親父を――」

「ブウン!!!」

次のステージへ！

日曜朝8時！（大嘘）